

東京都三多摩公立博物館協議会会報

ミュージアム多摩

No.46

特集 ミュージアム・アーカイブズと普及活動



野鳥の羽について解説を行う学芸員
(武蔵野ふるさと歴史館のイベントに日本獣医生命科学大学附属博物館の学芸員が講師として参加した)

2025.3

東京都三多摩公立博物館協議会

目次

【特集】ミュージアム・アーカイブズと普及活動

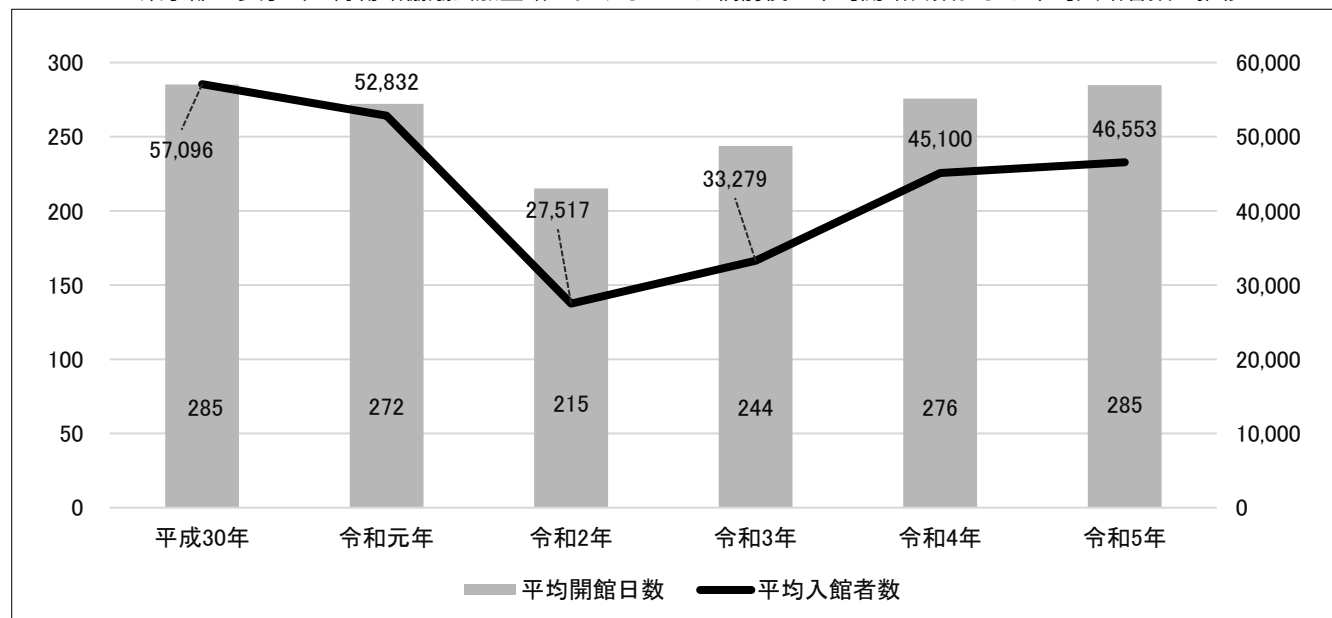
ミュージアム多摩 No.46 の特集テーマについて	2	
●コロナ禍における古文書学習とその発信	東村山ふるさと歴史館	3
●「教員のための博物館の日」を通じた学習利用の普及	府中市郷土の森博物館	4
●コロナ禍後の普及事業について	町田市民文学館ことばらんど	5
●「カレッジ」から「まち歴」へー講座事業改編の試みー	町田市立自由民権資料館	6
●令和6年度の教育普及活動について	青梅市郷土博物館	7
●開館50周年と常設展示更新	調布市郷土博物館	8
●瑞穂町郷土資料館の普及活動	瑞穂町郷土資料館（けやき館）	9
●ふれあい館の近況報告	奥多摩水と緑のふれあい館	10
●リニューアルオープン後の福生市郷土資料室の教育普及活動	福生市郷土資料室	11
●令和6年度事業報告	武蔵村山市立歴史民俗資料館	12
●五日市郷土館が長年取り組んでいること	あきる野市五日市郷土館	13
●羽村市郷土博物館の普及活動	羽村市郷土博物館	14
●相関的な博学連携 一生徒も先生も学芸員も一緒に学ぼうー	清瀬市郷土博物館	15
●ミュージアムアーカイブズ活用に向けた取組み	立川市歴史民俗資料館	16
●檜原村郷土資料館の近況報告	檜原村郷土資料館	17
●日野市郷土資料館の中学校・高等学校対応について	日野市郷土資料館	18
●日野宿本陣の建造物調査とクラウドファンディング	日野市立新選組のふるさと歴史館	19
●「江戸の糸あやつり人形」の調査・普及活動	小金井市文化財センター	20
●近年の普及活動を振り返る	くにたち郷土文化館	21
●里正日誌活字本完成と関連事業について	東大和市立郷土博物館	22
●コロナによる変化 ～古文書講座と植物観察会のかたち～	パルテノン多摩ミュージアム	23
●黒部隆名誉教授 岩石・鉱物標本コレクション そのアーカイブ化活動と教育研究利用	東京農工大学科学博物館	24
●たてもの園事業の現在	江戸東京たてもの園	25
●歴史資料室の職場体験	たましん歴史・美術館	26
●コロナ禍での Web 広報とその後のあり方	東京都立埋蔵文化財調査センター	27
●「戻る」ではなく、新たな段階に「進む」意識を	多摩六都科学館	28
●国立ハンセン病資料館 啓発活動の新たな取り組み	国立ハンセン病資料館	29
●科学に興味を持ってもらうために	コニカミノルタサイエンスドーム（八王子市こども科学館）	30
●はちはくの機織り体験	八王子市郷土資料館	31
●都立大学91年館特別ミニ展示のご紹介	東京都立大学91年館	32
●むいから民家園の近況報告	狛江市立古民家園（むいから民家園）	33
●連携をより広く、より深く	武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館	34
●コロナ禍前と比べ「対面」での利用者数が増加した普及活動	帝京大学総合博物館	35
●模型を活用した文化財の公開 / 教育 / 研究 / 記録	国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館	36
●日獣大付属博物館における普及活動	日本獣医生命科学大学付属博物館	37
●鈴木遺跡資料館と普及活動	小平市鈴木遺跡資料館	38
●東京都公文書館の普及活動	東京都公文書館	39
●中央大学大学史資料館における普及活動	中央大学大学史資料館	40
東京都三多摩公立博物館協議会会員名簿		41

ミュージアム多摩 No.46 のテーマについて

令和2年から始まった新型コロナウイルス感染症の広まりにより、社会は大きな変化を求められる事態になりました。令和5年5月に感染症としての分類が変更され、社会活動を元の状態に戻す動きがある一方で、それまでとは違う社会活動のあり方も模索されています。いろいろな形態を持っている加盟各館の、コロナをきっかけに変化した普及活動や、新たに行われている普及活動の成果や課題についてまとめました。

※各館からの報告は、2024年11月下旬に東京都三多摩公立博物館協議会加盟館より原稿を集め、まとめたものです。

東京都三多摩公立博物館協議会加盟館におけるコロナ禍前後の平均開館日数および平均入館者数の推移



※平成30年度から令和5年度を通して数値がある32館を対象とし、途中で加盟した館等を除外して集計した

各館の活動の例



瑞穂町郷土資料館（本文9ページ）



奥多摩水と緑のふれあい館（本文10ページ）



あきる野市五日市郷土館（本文13ページ）



小平市鈴木遺跡資料館（本文38ページ）

コロナ禍における古文書学習とその発信

東村山ふるさと歴史館 今村 奈央

はじめに

令和2年(2020)2月から急速に感染が拡大した新型コロナウイルスは、社会に変容をもたらしました。博物館も大きな影響を与えられた施設の一つであり、東村山ふるさと歴史館(以下、当館)も令和2年3月から6月まで臨時休館を余儀なくされ、その後も多くの事業を感染拡大防止の観点から中止・延期をしました。

全国でも博物館等の長期休館が相次ぐ中、各博物館でデジタルミュージアムなどの企画が立ち上がり、各館が工夫を凝らしてコンテンツ配信を行うようになりました。「不要不急の外出」を自粛する世間の風潮によって、各博物館において教育普及・情報発信の在り方の見直しが行われた時期だったのではないのでしょうか。本稿では、当館のコロナ禍によって新たに行った取り組みの事例をご報告します。

自宅での古文書学習

当館では、所蔵する古文書の解説講座、グループワーク形式の解説講座、古文書解説ボランティアの活動など、古文書関連事業を定例的に行っています。会員数は約30~40人ほどで、当館の事業の中でも参加者の多い事業のひとつです。しかし、コロナウイルスの感染拡大によりこれらの事業は、臨時休館中はもちろんのこと、日々の感染拡大の状況によって中止・延期を繰り返していました。また、当館には、感染拡大の令和2年度以前より常設展示室内で配布を行っていた「古文書にチャレンジ!」というワークシートがあります。当館が所蔵する地方文書の一部を抜粋し、自宅でも古文書読解にチャレンジできるというコンセプトで、古文書講座に参加していない一般来館者にも多くご利用いただいていたいました。

このワークシートを、感染拡大の状況を受け令和2年8月より市のホームページでの公開を開始します。講座などが急遽中止になるかもしれない不安定な状況の中でも古文書学習が定例できるように、以前の発行と頻度をほとんど変えずに更新を行いました。当館の主要な利用層である60~80代の利用者にも予想より多く利用していただくことができ、好評の声をいただいています。また、ワークシートのページのアクセスや問合せは、市内や近隣市だけにとどまらず首都圏外からもあり、館の利用者の範囲を広げることができました。コロナがきっかけとなって開始された試みではありますが、当館のデジタルコンテンツ配信の拡大の一つとなりました。今後は、ワークシートのみにとどまらず、古文書講座の動画配信などを視野に入れ、コンテンツの拡充を進めていきたいと考えます。

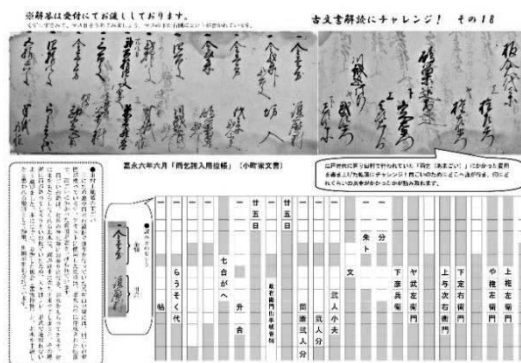
SNSの開設

先述の通り、コロナ禍をきっかけとし、各館でホームページやSNSなどでデジタルコンテンツの配信が始まっていきました。当館もその時流にのる形で、令和3年(2021)7月に、情報発信ツールとしてX(当時、Twitter)のアカウントを開設します。展示や事業の告知はもちろん、所蔵資料の紹介、博物館の紹介などを比較的自由的な形式で発信することができ、市のホームペー

ジなどと比べると利用者が情報にアクセスしやすいところが強みであるといえます。先に挙げた古文書のワークシートの公開や企画展示の動画配信などが進む一方で、それら事業の情報を市のホームページ上のみで公開することは拡散力に欠けており、今後もSNSの活用が必須であるといえます。当館専用SNSを開設して約3年経過していますが、SNSを見て来館したという声は年々多くなっており、その効果を実感しています。

今後の課題と展望

コロナウイルスという予想のつかない感染症の流行により、当館も博物館活動の変更や、情報発信の方法を検討し直す必要がありました。令和6年現在は、令和2~4年度当時のような「コロナ禍」と呼ばれる状況ではなくなりましたが、コロナ禍で生まれた意識の変化やインターネットの活用を前提とした発信のかたちは、今後の事業にも影響し続けるでしょう。当館は、インターネット上での目録や所蔵資料のデジタルアーカイブ等の公開は未だ整備されていません。利便性を向上させ、所蔵資料を広く知ってもらうといったことを実現するためにも、自宅から資料にアクセスできる環境の整備は大きな目標と課題です。一方で、コロナ禍での「外出できない」状況が生まれたことにより、「博物館で現物を見る」体験の貴重さ、かけがえなさという意識も強まってきました。インターネット上のコンテンツ配信の利用にとどまらず、そこから来館して現物を見てもらうための誘導を、新たな取り組みを展開する中でも意識していきたいです。



当館ホームページで公開する「古文書にチャレンジ!」



東村山ふるさと歴史館・たいけんの里公式

@higamura_museum

当館のX(当時、Twitter)のアカウント

「教員のための博物館の日」を通した学習利用の普及

府中市郷土の森博物館 荒 一能

府中市郷土の森博物館の学習利用

2020年に改訂された学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」が強調され、以前にも増して学習資源としての博物館が注目されている。当館は以前から博学連携の一環として学校団体の見学や体験の場を提供してきたが、近年はその活用さらなる発展が求められている。

当館では見学や体験に加え、様々な実物資料の貸出、主に市内の学校を中心とした出前授業など複数の学習利用のプランを設けている。2020年には小学4年生の社会科教科書の一部と東京都の副読本に市内にある大國魂神社の例大祭・くらやみ祭が受け継がれる祭として掲載され、その問い合わせが増加した。そのことを受けて市内外問わずに出前授業や、常設展示室で上映しているくらやみ祭のDVD貸出を実施し、好評を得ている。

しかし、学習計画やそれに沿ったスケジュールによるものか、これらを利用する学校は固定化し、特定のプランに偏る傾向がみられる。こうした状況から博学連携をより促進するためには、博物館を活用した多様な学習方法を教員に知ってもらうことが重要だろう。

「教員のための博物館の日」

学校・教育関係者に対して博物館での学習利用を広め、互いの情報交換を図るために、当館は毎年8月頃に「教員のための博物館の日」を開催している。

この事業は国立科学博物館が主催しており、「幅広い層の教員が博物館に足を運び、博物館に親しみをもってもらい、学習資源としての博物館を知ってもらうことを狙い」とするものである。国立科学博物館は2008年から開始し、2012年からはそれ以外の博物館も本事業を開催するようになった。参加者の定員や当日のプログラム内容などに決まった形式はなく、各館に任されている。

当館はこの事業を2019年から開催しており、2020年のコロナ禍による中止を除きこれまで計5回開催している。

当館の「教員のための博物館の日」

参加条件は学校・教育関係者であること以外は設けていない。市内外問わずこれまで利用実績のない教員にも研修と下見を兼ねた機会を設けられればという意図もあつてのことである。

年によって異なるが、午前は社会科分野、午後は理科分野という時間配分になっている。2019年と2022年は午前・午後いずれかの参加も可能としたが、それ以外は全日参加を条件とした。

プログラムは学習利用の案内と教員との意見交換会、それと年ごとに特集を設けている。初回の2019年は、常設展示室や園内にある復元建築物の解説、プラネタリウムの見学を中心とした。2021年はくらやみ祭、2022年は府中の自然、2023年は当館作成の解説シート・ワークシートについて解説した。2024年は学校団体の利用時以外は観覧機会が少ないプラネタリウム学習投影の実見などを行った。参加者からは好意的な感

想をもらい、本事業をきっかけとした学習利用の申し込みもあった。

これまでの開催をとおして

参加者数をみると、2019年は29名、2021年は28名、2022年は20名、2023年は23名、2024年は台風接近に伴う欠席があつたため16名となった。

参加者数が多かつた2019年は、多摩地域の博物館として初めての実施だつたことによるものだろう。他方、同程度の参加者数だつた2021年は、くらやみ祭の講座が要因だと思われる。それまで多摩地域を中心に知られていたくらやみ祭だが、教材となつたことによりその範囲を超えた需要が出た。そのため、教材研究の一環として多くの参加者を得たと考えられる。

参加者は多摩地域や23区内がほとんどである。市内からの参加はおおよそ2割程度であつた。参加者の内訳は、小学校の教員が半数以上を占めている。博物館の学習利用の実績はほぼ小学校であることから、プログラム内容も小学校の教員向けを中心としており、それが反映された結果であろう。なお、学習利用の実績が少ない中学校の教員も一定数の参加があり、関心はあると推測される。

意見交換会では、見学や体験、資料の貸出についての提案や要望、またそれぞれの現場の状況などが話題になる。互いに知る機会の少ない内容が多く、有益な時間になっていると思われる。どのようなものが学習に活用できるかは、学校・教育関係者との課題共有が重要になるだろう。

当館は府中に根差した博物館であるため、府中に関するものが話題の中心となる。需要のあるくらやみ祭は例外として、特に社会科の場合は市外の参加者に府中の話をしても、それをそのまま学習に活用するのは難しいだろう。しかし、当館のような地域博物館は各地に存在している。こうした博物館の存在を学校・教育関係者に知ってもらい、博物館の幅広い活用を促すことも本事業の目的の一つである。その点も踏まえつつ、「教員のための博物館の日」でさらなる博学連携を模索していきたい。



プラネタリウムでの学習投影実見

コロナ禍後の普及事業について

町田市民文学館ことばらんど 神林 由貴子

<はじめに>

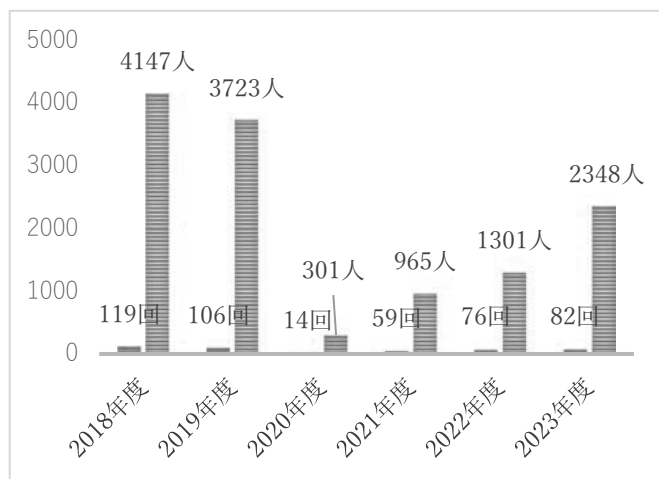
当館では2006年の開館以来、年4回の展示事業に加え、教育普及事業も重要な文学普及活動の一つとして位置づけ力を入れてきました。コロナ禍前の2018年においては、幼児から一般までの幅広い年代を対象とした事業を年間119回実施し、4,147人の方々にご参加いただいていた。しかし2020年の新型コロナウイルス感染症の蔓延により集会事業の実施は中止となり、文学館自体も休館を余儀なくされ、従来の事業の形態・あり方を見直さざるを得ない状況となりました。

<コロナ禍後の取り組み>

■集会事業

一般向けの講演会や講座、幼児親子対象のおはなし会などの集会事業は、2020年度に301人（事業数：14回）にまで落ち込んだ参加者も2023年度は2,348人（事業数：82回）にまで回復しました。実施に際しては、参加者同士の間隔に余裕を保てるよう広い部屋に移動する、参加人数をコロナ禍前の7～8割程度に限定するなど、安心して受講できる環境を心掛けています。コロナ禍ではオンラインやYouTubeでの配信が試みられましたが定着までには至らず、対面形式に戻っているのが現状です。2020年・2021年と中止していた、地域住民との共催による「文学館まつり」も再開し2022年・2023年とも3,000人を超える参加者でにぎわいました。しかし、高齢者が主なターゲット層であった事業においては参加者数が減少しており、コロナ禍後は参加者層の変化がみられます。今後はいかに若い世代を対象とした事業を展開していくか、その内容の検討が必要となっています。

【参加者数の推移／2018～2023】



■連携事業

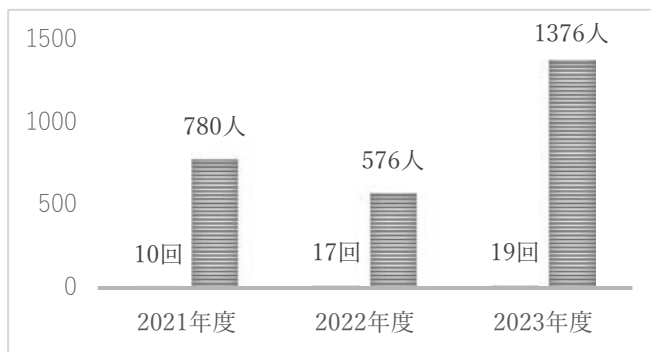
コロナ禍を契機に2021年度から「つながり」をテーマに掲げ、市民団体や市内大学等との連携事業を積極的に実施しています。公園でのおはなし会や市民企画の朗読会、大学主催の音楽劇等、当館だけでは実現できない多様な事業を入口として、文学に親しんでもらえればと考えています。

■新たな取り組み

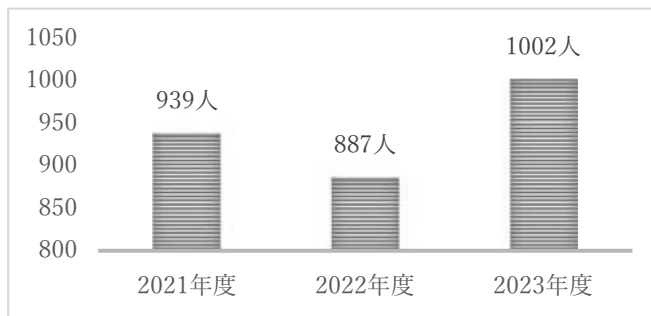
コロナ禍により来館型の事業の実施が難しくなったことを受け、若い世代を対象とした事業の一環として2021年から「ことばらんどショートショートコンクール」を立ち上げるとともに学校への出張授業を実施し始めました。本コンクールは、市内在住・在学の小学生、中学生、高校生を対象とした当館では初めての文学賞です。これに伴い実施している出張授業「ショートショート書き方講座」は、児童・生徒にとって創作の楽しさを知る貴重な機会となっているようですが、すべての学校で行えるわけではありません。そのため自宅でも書き方を学べるよう動画も作成してYouTubeで公開しています。

出張授業は年々回数を重ね2023年度には参加者が1,376人となりました。当初は外部講師と職員1名で担当していましたが、ノウハウを共有することによって現在では複数人で担当できるようになりました。コンクールの応募作品も増加傾向にあり2024年度は1,149作品となりました。また、2023年度から、町田ゆかりの文学を知ってもらおう新たなコンテンツを作成し試行を始めました。今後もコンクールの実施や書き方講座を継続していくとともに、学校のニーズを把握しながら新しいコンテンツを増やして定着させていくことが必要と考えています。

【出張授業数の推移／2021～2023】



【コンクール応募数の推移／2021～2023】



<おわりに>

コロナ禍以後、従来の来館型に加え出張型の事業を実施することで、これまで文学館を利用してこなかった方々にも文学の楽しさを伝えられるようになったのではないかと思います。しかしまだまだ改善の余地があり、また効率性も大きな課題です。今後も教育普及事業としての使命を見失わずに、社会の変化に柔軟に対応しつつ事業を展開していきたいと考えています。

「カレッジ」から「まち歴」へ ―講座事業改編の試み―

町田市立自由民権資料館 松崎 稔

はじめに

当館は、2020 年度に「あり方見直し方針」を作成し、めざす姿として「歴史の学びを通して人と地域をつなぐ」を柱の一つに据えた。それをふまえ、講座事業の再編や出張授業に取り組んでいるが、今回はそのなかで、講座事業の改編について取り上げたい。

町田市立自由民権資料館とは

当館は、自由民権百年の熱気冷めやらぬ 1986 年に「自由民権運動」を柱に据えたテーマ館として開館した。町田市域を中心にした多摩・神奈川の自由民権運動と、町田市域の歴史に関する史料を収集・保管し、整理・研究した成果で常設・企画展を開催するとともに、講座を運営してきた。

自由民権百年時、多摩では武相民権運動百年記念実行委員会が組織され、様々な学習会が催された。民権家村野常右衛門のご子孫がその市民の学びの姿に感銘され、自由民権運動の意義を伝えるために活用してほしいとの意向で寄贈されたのが、当館の敷地である。つまり、市民の学びが当館開館につながったといえる。

「町田自由民権カレッジ」から「まち歴」へ

当館では、2007 年に『武相自由民権史料集』を刊行したが、そのころ館の利用者は 4000 人を切っており、刊行した史料集をどのように活用し、市民に還元するかが大きな課題だった。その課題に取り組む企画が、3 年かけて卒業する講座「町田自由民権カレッジ」（以下「カレッジ」、①講義、②史料講読、③ゼミでの個人研究・卒論）の開講（2009 年度）で、「知る」だけでなく、自ら「調べる」「考える」楽しみを感じ、卒業後もそれを継続できるスキルを身に付けてもらうことがねらいだった。団塊の世代が退職を迎えた時期だったことも意識していた。30 名の募集で、1 期 22 名、2 期 17 名、3 期・4 期は各 11 名の計 61 名の卒業生を出した。「カレッジ」は、2021 年度 4 期 12 年（コロナの影響で 2020 年度は休講）で閉講したが、そこには上記の卒業まで残る受講生の減少を需要の低下とする判断があった。史料整理の遅れ、企画展準備期間の確保、IPM の取り組み、デジタルコンテンツ作成など課題が山積していたことも、判断の大きな要因である。

その間、閉館となった市立博物館から考古・歴史・民俗資料の教育委員会への移管があり、当館はこれまで以上に町田市域の歴史を積極的に扱うことが求められ、これまでの自由民権運動にくわえ、2022 年からは通史の常設展も開設することになった。自由民権運動に重点を置き運営してきた当館は、町田の歴史全般を扱う郷土資料館としての性格を強化していくことになった。

このような状況や課題をふまえて 2023 年に開講したのが、「町田歴史講座」（通称「まち歴」）である。「カレッジ」が深く学ぶことを求めている方を対象とした講座だったのに対し、「まち歴」には、多様な学びのニーズに応えようというねらいがある。2023 年度は以下のようなラインナップになる（内部講師名略、白抜き丸数字は外部講師）。

- ①「町田の歴史」展深掘り解説 江戸時代の市域の生業
- ②絵図を見てまちへ出よう―野津田村絵図編―
- ③語り合おう！町田の文明開化―南多摩郡最初の結社・責善会
- ④知らされていた黒船来航情報―幕府外交とオランダの恩恵

―（西澤美穂子氏）

- ⑤古代の町田は武蔵国？それとも相模国？―考古学からみた国堺―（依田亮一氏）
- ⑥『町田市史史料集』を読む―江戸時代編③―武家奉公人関係資料を読む
- ⑦出張ギャラリートーク 知るともっと展示が楽しくなる！自由民権資料館と常設展「町田の歴史」案内
- ⑧ミュージアムトーク 本の著者に会ってみよう！「町田」の片隅で選挙と日本国憲法をたぐりよせる（大門正克氏）
- ⑨ワークショップ 石に刻まれた薬師池の歴史
- ⑩高ヶ坂石器時代遺跡～山本亀三が見た町田の遺跡～
- ⑪被災した紙資料を救う！文化財レスキュー体験ワークショップ（貝塚建氏）

講義型（①③④⑤⑥⑦⑧⑩）・対話型（③⑧）・ワークショップ（②⑨⑪）・史跡巡見（②⑨⑩）を織り交ぜた企画で、1 講座ずつの受講申込としている。座学でも、『市史史料集』掲載の史料や新設の常設展「町田の歴史」の 1 コーナーから深掘りしたもの（①⑥）もあれば、展示の概要紹介したもの（⑦）もある。時代も縄文から現代までと、これまで自由民権資料館が対象としてこなかった時代も含まれている。その効果もあってか、2023 年度の当館利用者は、約 8000 人となった。

今年度からは、対象を子どもにも広げようということになり、夏休み期間中に「町田の伝統芸能「丸山獅子舞」を体験しよう」という子ども向けワークショップも開催した。今後も、社会の需要を見極めながら多様なニーズに応えていきたい。

「カレッジ」同窓会と「まち歴」のこれから

一方、閉講した「カレッジ」だが、これまで卒業された方々は同窓会を組織し活動されてきた。当初は月例会を開き、各自の報告の場としてきたが、現在は分科会の活動を主にしている。分科会には、厚木の民権家天野政立の史料を読み解いている「天野政立研究会」、日清日露戦争時の従軍日誌や書簡を解読している「蚯蚓の会」、歴史から現代の問題まで個人の関心を表明し議論する「一基金会」、研究者の論文を講読・論評し、著者の問題意識を学ぶ「くんの会」がある。各分科会では「まち歴」の受講者への勧誘など「カレッジ」卒業生の枠以外の会員募集を始めている。また、市域には市民大学の郷土史講座卒業生による「史考会」や「町田地方史研究会」という組織もある。

今後当館は、これらの組織と「まち歴」などさまざまな機会を通して関わりながら、学びのコミュニティが形成され、社会に広がっていくための環境づくりを模索していきたい。



「まち歴」②
「絵図を見てまちへ出よう」の様子

事前に村絵図からさまざまな情報を読み取っている

令和6年度の教育普及活動について

青梅市郷土博物館 小峯 勝

はじめに

新型コロナウイルス感染症が猛威を振るっていた時期を経て、実施を見合わせていた事業のうち、令和6年度に実施した主な事業を紹介します。

1 親子昆虫観察会

当館では、8月15日（木）に、青梅市の釜の淵公園にて、「親子で学ぶ！夏の夜の昆虫観察会」を開催し、天候にも恵まれ、親子連れの参加により、セミの脱皮にも遭遇するなど大変盛り上がりしました。

釜の淵公園は、多摩川沿いに位置する自然豊かな公園で、四季折々の風景が楽しめるため、多くの市民に親しまれています。特に夏の夜は風が心地よく、自然環境を活かした楽しい学びを提供でき、特に昆虫観察には最適な場所です。

午後7時50分までの時間帯で、昆虫に関する豊富な知識を持つ西多摩昆虫同好会の講師1名と補助者2名の協力のもと、16名の参加者が熱心に観察会を楽しみました。

カブトムシやクワガタなど、夏の夜ならではの昆虫たちと触れ合うことで、子どもたちは自然の魅力を存分に感じ取ることができ、また、大人の方々も子どもたちと一緒に学び、楽しいひとときを過ごしました。

参加者からは、夜間のイベントは日中のイベントと異なり猛暑も凌げ、「同様のイベントを定期的に開催して欲しい」という声も多く寄せられ、非日常的な体験ができるため、親子での参加者にとって特別な時間となったようです。



親子昆虫観察会

2 博物館学芸員実習の受け入れ

当館では、学芸員養成課程開講大学の依頼により、博物館の学芸員として実践的なスキルを磨くなど、博物館業務に関連する専門的な知識を得てもらうため、主に青梅市内在住の学生を対象に博物館実習生を受け入れてきました。

令和4年度より再開し3年目を迎え、令和6年度は7月29

日（日）～8月9日（金）のうちの10日間で2名の実習生を受け入れました。具体的な実習内容については、博物館機能を重視したプログラムを実践形式で作成しました。具体的には、野外展示施設の重要文化財旧宮崎家住宅解説シートの作成、古文書の整理分類、文献図書資料および民具の取り扱いと整理、考古資料の取り扱い、特別展の展示替え補助作業等を全て当館職員および関係者による指導助言により実践してもらいました。資料の取り扱いのみならず、職員や他の実習生と共に協力しながら業務を遂行することにより、博物館の学芸員として重要な能力の一つであるコミュニケーションスキルの向上にも役立ったものと考えています。

3 文化財解説ボランティア

当館では、文化財解説ボランティアによる団体見学者への当館の常設展、特別展および当館に隣接する旧宮崎家住宅の展示解説を、令和4年度より再開しました。

令和5年度には、新型コロナウイルス感染症の影響により大幅に減少していたボランティアの会員数も、再募集により以前の水準に戻りつつあります。令和5年度は15団体、800人余りの方に文化財の解説を行うなど、徐々に以前の光景が見られるようになってきました。

当館では、市内の小学校の社会科見学等による利用が主になっており、子どもたちにわかりやすく親しみやすい解説をとボランティア各自が工夫をして行っています。展示解説中は少人数のグループに分かれ、ボランティアの解説や、子どもたちに興味をもってもらうようと様々なことを問いかける声、子どもたちが元気よく問いかけに答える声が聞こえます。

また、毎月一度開かれている勉強会では、毎回ほとんどのボランティアが参加し、解説の反省点、改善点を話し合ったり、新たな知識を共有する場として活用しています。



重要文化財（建造物） 旧宮崎家住宅

開館 50 周年と常設展示更新

調布市郷土博物館 佐山 淳史

はじめに

令和 6 年 11 月 24 日で、調布市郷土博物館は開館から 50 年を迎える。これを期に常設展示の展示構成を見直し、11 月 19 日（火）から新たな装いで一般に公開する。大規模な工事を伴う展示室リニューアルというわけではなく、一部の展示造作物を委託で製作する以外は、多くの部分を職員や関係者の手で作り上げた展示更新である。この原稿の執筆時点ではオープン前ということもあり、すべてを紹介できる状況ではないが、展示見直しの視点や、造作物の内容等について紙面でできる限り共有し、何らかのお役に立てればと思う。

展示見直しの視点

当館の常設展示は原始・古代から始まり現代へ至る、いわゆる通史展示の構成となっていた。今回展示を見直すにあたり全体の展示構成についても検討を加えたが、やはり通史展示の方が来館者にとってもなじみがあるということで、更新後も通史展示の構成を継続することとなった。

そこで、更新にあたり展示の要素について再検討を加えていった。検討した部分は多岐にわたるが、重視した点のうち、大まかな要素を挙げると以下の通りとなる。

（1）最新の成果の展示

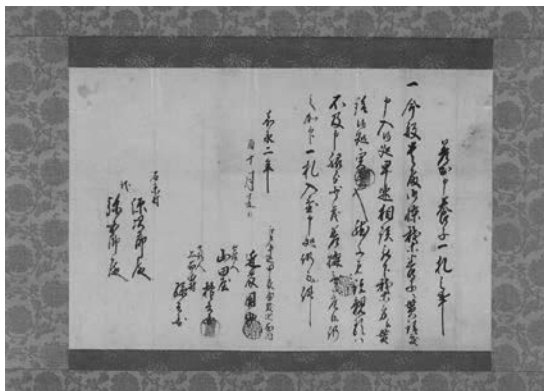
特に埋蔵資料などで、新たに市内で発見された新資料を活用し展示を再構成した。

（2）地域由来の資料の展示

従来の展示では、特に近世において市域外の資料も用いて説明をしている部分が見られたが、これを市域に関する資料を中心とした展示として再構成した。

（3）来館者要望の取り入れ

アンケート等で来館者の関心が高いことが窺える、新選組（近藤勇）や映画産業についての展示を補強することとした。新選組関連では、近藤勇養子縁組状のレプリカを新たに作成・展示し、映画産業に関わる展示は展示室外のホールに新たなコーナーを作成した。



近藤勇養子縁組状（調布市指定文化財）

後に新選組局長となる近藤勇が、宮川家から近藤家の養子となった際の養子縁組状。資料保存の観点から、レプリカを作成した。

展示造作について

今回は工事を伴う展示更新ではなかったため、基本的には展示什器を含め既存の設備を全てそのまま使うこととなった。

そこで、展示ケースの側面や背面を利用し、導線の案内や、解説を行うなどの工夫をして、展示内容を少しでも充実させるようにした。また、既存のウォールケース内についても、大見出しを記したタペストリーやパネルのデザインを専門の業者に委託し、デザイン性を高めることで、刷新感を演出した。



展示ケース側面への装飾



ウォールケースのタペストリー

おわりに

今回展示更新にあたって常設展示図録の作成も行った。図録作成にあたり 50 年の当館の歩みを振り返るなかで、改めて当館設立当初にあった市民からの博物館建設への働きかけなどを確認することが出来た。これは、常設展示を改めて見直すということとあわせて、当館の足跡を見つめ、学芸員の知見を深めるという意味で大変意義深いものであった。

一方で、展示室の更新を行っていると、開館から 50 年という月日の経過により設備面での老朽化を感じる部分も多かった。例えば、当館ではウォールケース内を含め多くの展示什器内の照明は紫外線カット加工をした蛍光灯を使用している。蛍光灯は 2027 年末で製造中止となるため、今回 LED 化をするタイミングとしては好機であったが、残念ながら予算が付かず更新は出来なかった。ただし、ピクチャーレールの設置や展示室の壁面の塗り替えなど、設備更新について一歩前進した部分もある。思うように設備更新が進まない部分は多々あるが、引き続き出来ることから少しずつ変えていきたいと考えている。

今回、工事を伴うようなリニューアルに比べてささやかな事例とは思いつつ、当館の事例を共有させていただいた。今後、公立博物館を取り巻く財政状況は厳しさを増していくと考えられるので、制限がある中で少しでも魅力的な展示が作れるような工夫が、これからはさらに必要な時代となるだろう。ぜひ他館の皆様にも様々な事例を御教示いただきたい。

瑞穂町郷土資料館の普及活動

瑞穂町郷土資料館（けやき館） 北爪 寛之・磯部 隆之

〇はじめに

瑞穂町郷土資料館けやき館は、今年度 10 周年を迎えました。コロナ禍を機に、新しい取り組み、情報発信について模索している途中にあります。

博物館では、展示や講座を通して、来館・参加していただいた方への情報発信をしていますが、メディアを通じての情報発信はノウハウも乏しく、積極的に行えていませんでした。その一方で、今年度から特定外来生物に関する体験型イベントを始めるなど、新たな取り組みにも着手しました。

そこで、当館の普及活動として、メディアを通じた情報発信と体験型イベントを通じて、当館の普及活動の一部を紹介します。

〇メディアを通じた情報発信

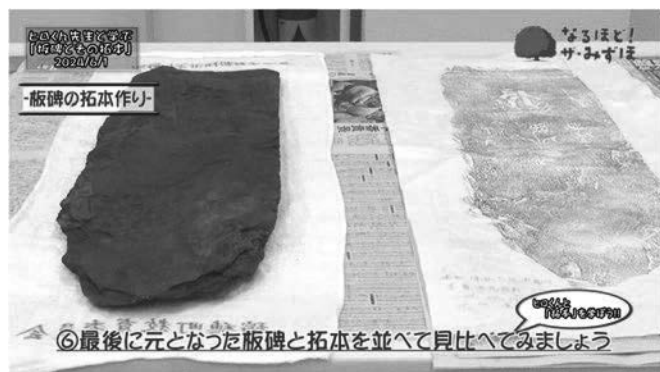
まず、ラジオ・ケーブルテレビを通じた情報発信について取り上げます。

「とれたてラジオ」では、隔月 1 回のペースでけやき館で行われるイベントについて、学芸員が地元ラジオ番組に電話出演し、広報するというコーナーです。1 回 15 分ほどの番組ですが、ラジオパーソナリティと掛け合いをしながら紹介することで、内容を掘り下げて伝えることができます。

また、近年は瑞穂町の見どころ紹介(自然や史跡の紹介)や、けやき館の見どころを併せて紹介することで、新しい魅力を加えて発信できるようになりました。

また、今年度から始まった企画に、「なるほど！ザ・みずほ」という地元ケーブルテレビでの情報発信があります。こちらは、学芸員の活動を通してけやき館について情報発信するという趣旨で企画された番組で、月に 1 回、15 分の番組で、学芸員が持ち回りで担当しています。テーマは展示・イベントの見どころ解説、フィールドでの自然の解説などを行っています。

学芸員が解説する機会は限られているので、わかりやすく、かつ少し専門的な話題を提供できる良い機会となっています。また、普段連携してくださる講師を紹介できること、史跡や自然の記録化など、良い点も多くあります。



(写真1)「なるほど！ザ・みずほ」放送の様子

〇「みずほまち特定外来生物 バスターズ」

近年、特定外来生物についてのニュースが各地で取り上げられます。瑞穂町も例外ではなく、町内各所で外来の動植物が生育しています。このイベントは、まず特定外来生物について学んだ後、実際に屋外で駆除を体験するというもので、当日はオオキンケイギクとアメリカザリガニを駆除しました。

親子連れの参加者だけでなく、ボランティアの大学生や専門アドバイザー・新聞記者・ケーブルテレビ・町広報課など、さまざまな人が集まり、協力して駆除を行いました。



(写真2) オオキンケイギクの駆除

〇「みずほまち特定外来生物 バスターズ・キッチン」

「みずほまち特定外来生物バスターズ」に続く第2弾として実施しました。昨年から特定外来生物に指定されたアメリカザリガニを駆除するため、町内で捕獲して泥抜きした個体を解剖し、調理・試食しました。

初めに講座で条件付き特定外来生物の扱い方の注意点や、アメリカザリガニの体の仕組みなどを学び、解剖では体の各器官や部位を確認しながら、可食部になる腹部を剥いて分離しました。試食は、グラタン・ピザ・素揚げの3種類を作り、美味しくいただきました。

〇イベントを終えて

オオキンケイギクは 90 リットルのポリ袋で 13 袋分を駆除し、アメリカザリガニは新年度から通算して 200 匹以上を捕獲しました。捕獲してからイベント開催までの間は、館内で生態展示を行いました。2 回のイベントを通して、身近に生きている特定外来生物を知ってもらい、捕獲・駆除するだけでなく積極的な活用方法を考える良い機会になりました。

〇おわりに

当館は、資料館本来の役割に加え、各種イベントや講演会を開催しながら、多様な文化活動の拠点となる施設です。これからも多くの方々と協力・連携しながら地域貢献に取り組み、より一層魅力ある資料館を目指して活動していきます。

ふれあい館の近況報告

奥多摩水と緑のふれあい館 木宮 則徳

奥多摩水と緑のふれあい館は、東京近代水道 100 周年及び小
河内ダム竣工 40 周年の記念事業として、東京都水道局と奥多摩
町の共同で旧奥多摩郷土資料館跡地に建設し、平成 10 年 11 月
27 日にオープンし開館 27 年目を迎えました。館内では奥多摩
の豊かな自然・ダム仕組み・水の大切さなどを紹介しながら、
東京都の水源地である奥多摩町と水道を利用する都市住民との
交流を図ることを目的に、奥多摩町の歴史・文化・郷土芸能・地
場産業等の紹介及び企画展示を行い、都市と山村のふれあいの
場として事業運営を行っています。

館内は主に郷土資料展示ゾーン、水源の自然ゾーン、小河内ダ
ムゾーン、セミナールーム、水と暮らしゾーンからなり、レスト
ラン、特産品ショップも併設しています。

館内 1 階の奥多摩町歴史民俗資料展示室「水のふるさと」では、
縄文時代の出土品をはじめ、武家文書や旧小河内村に古く伝わ
る国指定重要無形民俗文化財である小河内の鹿島踊、川野車人
形をはじめ、東京都指定無形民俗文化財である郷土芸能の展示
に力を入れており、実際に祭事で使用される道具や、衣装の展示
に加え、画像による紹介も行っています。

奥多摩町には獅子舞をはじめ、数多くの郷土芸能が存在し、地
域の方々及び保存団体の並々ならぬ努力と熱意により保存、伝
承が図られている貴重な文化財です。しかしながら、どの芸能保
存団体にとっても若者をはじめ人材が不足し、伝統芸能の継承
には苦慮しており、併せて、過疎化が進む中で伝統文化の継承、
後継者の育成は大きな課題となっています。館では、この地域に
伝わる伝統芸能を披露していただくものとして、イベントを開
催し、館内にて小河内の鹿島踊、原獅子舞、川野獅子舞、川野車
人形など、郷土芸能の上演を行い、毎年多くの方々に来館してい
ただき、地域では味わえない間近で鑑賞することが出来ます。



令和 5 年 3 月国重要無形民俗文化財に指定された川野車人形

館では年間を通じてイベントを開催しており、令和 6 年度は
春の奥多摩ミニコンサートをはじめ、写真展「奥多摩のレトロ写
真」、オリジナルグッズ作り体験、水源地郷土芸能イベント、ヘ
ブンアーティスト公演など、毎月来館者の心を楽しませる催し
を行っています。



オリジナルグッズ作り体験



ヘブンアーティスト公演

今後も豊かな水源地である奥多摩を感じてもらうとともに、
多様化する来館者のニーズに応えるべく、事業運営に取り組ん
でいきたいと思っています。

アクセス

車：圏央道青梅 IC より青梅街道を山梨方面に約 30 km

電車：JR 青梅線終点奥多摩駅より、西東京バスで約 20 分

お問い合わせ電話番号 0428-86-2731 水と緑のふれあい館まで

リニューアルオープン後の福生市郷土資料室の教育普及活動

福生市郷土資料室 青海 伸一^{せいがい}

福生市郷土資料室は、令和6年1月24日にリニューアルオープンをし、展示内容の刷新を図るとともに、様々な教育普及活動にも取り組んでいます。ここではそれらのうち、いくつかの活動を紹介いたします。

触れる道具の設置

リニューアルを機に、遅ればせながら触れる道具コーナーを設置しました。設置した道具は、黒電話、炭火アイロン、ダブルCDラジカセの3つです(写真1)。ダブルCDラジカセは、リニューアルを機に生まれた再現展示の時代設定(戦前、昭和30~40年代、昭和60年代~平成初期)とリンクさせ、平成に入る頃の道具を選びました。

触れる道具は、触った際に動きのあるものが良いと考え、電源が入ってなくてもカセットテープの挿入部分が開く、ダブルCDラジカセを採用しました。



写真1 福生思い出写真館と触れる道具

「福生思い出写真館」と「生活調査プロジェクト」、「懐かしい思い出共有プロジェクト」

リニューアルでは、「福生思い出写真館」という写真を4枚掲示する新コーナーを作りました。年に4回テーマを決めて、昔の風景写真を掲示しています。またこれらの写真に関連する質問を記した「生活調査プロジェクト」というシールを貼ってもらう形式のアンケートと、思い出を自由に記入できる「懐かしい思い出共有プロジェクト」を同時に実施しています(写真1)。

テーマは、季節や企画展示の内容などに関連するものを選び、それらをきっかけとしたアンケートへの参加や思い出を掲示することで、来場者が自由に懐かしい思い出を語り合える場を作り出すことにしました。

気づきを促すキャプションの設置

展示資料には、通常の解説やキャプションとは別に、質問形式の気づきを促すキャプションを設置しました(写真2)。これは、展示を見ている人に、「資料のこういうところまで見てもらいたい!」とか「ちょっと視点を変えることでより細かな発見をしてもらいたい!」といった意図を持って設置したものです。

基本的には答えを示すのではなく、見ている人自身で何かを発見してもらうことを意図し、質問はできるだけ素朴かつ意外な発見につながるように、他の博物館での取り組みも参考に設置することとしたものです。

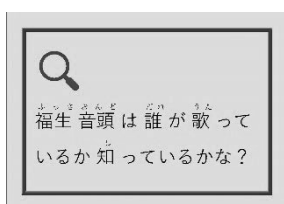


写真2 気づきを促すキャプション

ミュージアムトークの開催

これまでも展示解説会はたびたび行ってきましたが、リニューアル後は、年に6回行うすべての企画展示において、ミュージアムトークを行うこととしました(写真3)。内容は展示解説や、絵画作品の展示の際には対話型鑑賞を実施するなどし、来場者とコミュニケーションを取るよう心がけています。

展示はただ見るよりも、解説を聞いた方が印象に残るを考え、できるだけ来場者に向けて、展示担当者の思いを直接伝える機会を増やすよう努めています。



写真3 ミュージアムトークの様子

小学生向けワークシートの取り組み

小学生向け事業は以前から行われており、企画展示ごとに作成するワークシートも長い歴史を有しています。近年のワークシートは、何か答えを探しに行くものではなく、小学生が自分にとって興味を持つものを選び、感じたことを書いてもらえるようにし、企画展示についての理解や、自分なりに考えるきっかけとなることを意識しています。

また、これらのワークシートの一部は、その内容を展示室入口付近に掲示し、来場者とその内容を共有しています(写真4)。小学生の視点から、大人にも新たな気づきが生まれることや、子どもたちにとっても自分たちがやったことが掲示されることで、やりがいにつながるのではないかと考えています。



写真4 掲示したワークシート

まとめに代えて

福生市郷土資料室ではリニューアルオープンを機に、何度も足を運んでもらえるような工夫をしていくこと、博物館ならではの学びにつながるようにしていくこと、展示資料を通した対話の機会を生み出していくことを目指した教育普及活動の実践に取り組んでいます。

もちろん、古文書学習会や展示関連講座、文化財・史跡ガイドツアーといった従来からの教育普及活動も行っています。これらに加え、展示室での学びが博物館へ足を運ぶきっかけになると考え、博物館ならではの発見、体験ができる場、博物館資料を通した対話の場を提供することで、博物館としての魅力をさらに高めていけるよう、これからも展示室や博物館資料を活用した教育普及活動に取り組んでいきたいと思っています。

令和6年度事業報告

武蔵村山市立歴史民俗資料館

近況報告と今回紹介する事業

新型コロナウイルス感染症が広がりを見せてから4年が経過しました。新型コロナウイルスの感染症感染拡大防止が叫ばれた当時、当館ではアルコール消毒液による手指の消毒及びマスクの着用などを来館者をお願いするほか、体験教室の中止や座席の間隔を空けるなどの対応を余儀なくされ、事業に影響が生まれました。令和6年度現在、当館では資料館のエントランスホールや映像コーナー付近にアルコール消毒液を設置するなどの対応を取るなど今でもその名残が所々に見られますが、コロナ禍前と同様に制限なく事業を実施しています。

今回の連載では、令和6年度に当館で実施した夏休み子ども展示及び写真展を紹介します。

夏休み子ども展示「遺跡ってなあに？」(7/13～9/8開催)

武蔵村山市内には現在までに40か所の遺跡が確認されています。しかし、自分たちの生活している家や学校のすぐ近くに遺跡があることはあまり知られておらず、学校の授業でも取り上げることはほとんどありません。そこで、今回の夏休み展示では以下の構成にすることで、遺跡について分かりやすく紹介しました。

・その1「遺跡ってなあに？」

遺跡の説明、市内の遺跡範囲を示した地図上に小中学校やランドマークとなる建物や公園を重ねることで、遺跡を身近に感じてもらう。

・その2「いろんな時代の遺跡」

旧石器時代から奈良・平安時代の大まかな流れと、市内で発見されている遺跡を紹介する。市内には様々な時代の遺跡があることを知ってもらう。

・その3「発掘ってなあに？」

イラストを用いて、発掘調査の手順を示す。最後には、「土器や石器を見つけた時はどうすればよいのか？」を説明し、勝手に発掘を行ってはいけないことや、資料館の職員に知らせる必要があることを紹介する。

今回の夏休み子ども展示では、館内を回れば解ける簡単なクイズを用意し、クイズを解いた方に対して資料館特製バッチを交付しました。バッチは9種類用意し、選択制で子どものほか大人にも交付しました。

また、土器をかたどったパズルを2種類用意し、パズルを解いてもらうことで、子どもたちに土器について興味を持ってもらえるように努めました。

夏休みに開催した展示ということもあり、期間中は多くの子どもたちが来館されクイズを楽しみました。



夏休み子ども展示「遺跡ってなあに？」

写真展「武蔵村山の指定文化財」(9/21～11/17開催)

今年度は特別展に代わり写真展を開催しました。本展では、文化財を保存することの大切さをより多くの人々に周知することを目的として、都指定2件と市指定23件の文化財の写真を展示しました。展示した写真は、文化財所有者のご協力を得て、この展示のために新たに撮影したものになります。

また、この写真展では、併せて普段非公開の市指定文化財「指田日記」「乙幡市郎右衛門家文書」「内野佐兵衛家文書」「渡辺源蔵家文書」「猿久保尾根の庚申塔」の実物を展示しました。

写真展は11月17日をもって終了しましたが、この展示で使用了写真の一部は、市ホームページに掲載しましたので、興味のある方はご覧ください。



写真展「武蔵村山の指定文化財」

今年度開催の主な事業

- ・夏休み親子体験教室「縄文ポシェットを作ろう」(7/28,8/24)
- ・文化財見学会「中世の武蔵村山」(11/16)
- ・狭山丘陵市民大学「狭山丘陵の獅子舞」(11/30,12/7)
- ・企画展「武蔵村山市の戦跡」(12/7～3/30)
- ・歴史講座(2/15)

五日市郷土館が長年取り組んでいること

あきる野市五日市郷土館 武田 寛之

はじめに

新型コロナウイルス感染症の影響により、私たちの生活は大きく変わりましたが、今では感染症の蔓延も落ち着き、五日市郷土館においても、通常通りの開館の上で、団体見学の受入れや例年の事業の開催など、以前のような日常が戻ってきました。ここでは五日市郷土館での長年の取組事例と共にその内容を紹介いたします。

①例年の取組・年中行事

敷地内にある古民家・旧市倉家住宅の活用事業として、季節に合わせた年中行事の展示や、庭の畑にて作物の栽培を行っています。それに合わせて館でも年中行事の展示を行い、それぞれ来館された方々に季節のうつろいや当時のあきる野市の雰囲気を感じていただけるようにしています。今年も、正月飾りに始まり、雛人形や五月人形、鯉のぼり、七五三の衣装や写真の展示など、地域の方々から寄贈いただいた大正から昭和、平成の頃の資料の展示を行いました。職員にとっても、当時のあきる野市の状況に思いを馳せながら、季節の移り変わりを来館者の方々と共に感じることができる、毎年の大切な事業です。



郷土館2階ロビーにて、7mの鯉のぼりを展示、フォトスポットに

②例年の取組み・古文書の展示

他の取組として、毎年東京文化財ウィークの開催に合わせて、館内で古文書の特別公開を行っています。今年度は市内の古刹である大悲願寺に残された東京都有形文化財に指定されている「大悲願寺文書」のうちの一部（全部で10,335点あります）の1616～18年頃と推測される2点の古文書を公開しました。この2点の文書は、現港区の増上寺の住職（叔父）から、当時の大悲願寺の住職（甥）へ宛てたもので、別々の寺で同じ住職として過ごす親族が、体調を案じたり、食材や防寒具を送りあったりとの交流の様子が窺える内容で、保存状態も良く、とても貴重な古文書です。今回で4回目となる文化財ウィーク期間の取組であり、古文書というと少し難しそう、というイメージをもたれる方もいるかもしれませんが、少しでも親しみやすくなるよう、解説や解説文、展示方法など、どなたでもご覧になれるように例年工

夫をして展示をしています。



旧市倉家住宅にて、昭和30～40年代の七五三の衣装の展示

他にも、「郷土の古文書」シリーズとして、地域の古文書を紹介する発行物も長年継続して実施しており、地域に残された古文書の内容をわかりやすく紹介しています。現在は、享保13年にあきる野市内からお伊勢参りを行った方々の日記を基にし、どのような行程で旅行をしたかの解説と、館内にて地図も含めた関連展示も行っており、今年から4回シリーズとして実施しています（来年度中まで続く予定です）。

このように古文書の公開活用ができるよう、これからも郷土に残された古文書の調査結果を皆様にわかりやすく紹介し続けていきます。



郷土の古文書の展示の様子 古文書のレプリカと旅程地図も作成

これからの取組

昭和56年にオープンした五日市郷土館。様々な取組が行われてきましたが、今回ご紹介した取組も長年行ってきたものです。より多くの方に郷土の歴史を知っていただくため、今後は、展示の仕方やアプローチの方法を変えていくとともに、新たな取組も行っていく必要もあると感じます。予算や方法は限られますが、工夫を重ねながら、これからもあきる野市の郷土の歴史を発信し続けていきます。

羽村市郷土博物館の普及活動

羽村市郷土博物館 枝野 孝彦

博物館の普及活動

当館は地域の身近な博物館として、市内の方にはもちろん市外の方にも郷土の自然、歴史、文化について知っていただくとともに、郷土資料を後の世代へ伝え保存していくことが、求められている役割のひとつであると考えています。

その取り組みとして主要なものは、常設展示や企画展、体験学習会などですが、この他に当館で行っている普及活動の事例について紹介します。

公式 SNS の活用

コロナ禍をきっかけに新たに始めた取り組みとして、令和2年度から博物館公式の X (旧ツイッター) アカウントを開設しました。展示や体験学習会などの情報を中心に発信しており、前号のミュージアム多摩で報告した時点でのフォロワー数は 924 人でした。その後、1 年間で約 190 人増加しています。今年は館内へ、新たに公式 SNS アカウントへ誘導するための二次元コードも掲出しており、さらなるフォロワー獲得を目指しています。

また、発信内容に対する反響(表示回数や「いいね」の数など)から注目されやすい情報のジャンルや効果的な表現方法を模索するとともに、今後、インスタグラムの公式アカウント開設にも取り組み、情報発信力を高めていきたいと考えています。

器片を洗浄して拓本(土器片の表面の文様を和紙と墨で写しとったもの)を作成し、ミニ展示を行いました。このミニ展示は常設展示室の入り口付近に約 2 週間設置し、生徒たちの作り上げた成果を来館者に見ていただくとともに、制作者である生徒にも博物館の普及活動を体験してもらいました。



職場体験学習で中学生が制作したミニ展示



企画展準備中の様子の投稿(左)

館内掲示の公式 SNS アカウント誘導用二次元コード(右)

市内中学校の職場体験学習受け入れ

例年、市内中学校の2年生と特別支援学級の生徒が、市内の事業所で職場体験学習を行っています。当館では、今年度は2校から4名の生徒を受け入れ、学校ごとに4日間実施しました。

職場体験学習の内容として、まず、来館者には公開していない博物館収蔵庫内を含む館内の見学を行いました。さらに、常設展示室の点検、寄贈資料の写真撮影、展示で使用する飾りの作成、来館者への受付対応など、博物館の運営に関する様々な仕事を体験する構成としました。最後に、市内で出土した本物の縄文土

出前講座

市民で構成される団体や学校などからの依頼を受けて現地へ出向き「羽村の歴史(概要版)」や「羽村の自然」などの内容で出前講座を開催しました。

令和6年度は現時点で3回開催しており、その中には市内の小学校3年生の理科の授業としての依頼もありました。この時のテーマは「羽村の自然」でした。羽村市内で見られる植物や動物について、収蔵資料の中から、野鳥の剥製を持参し、写真画像や動画で構成したスライドショーの形式で講座を行いました。その後、出前講座に参加した児童が家族と共に博物館へ来館したこともあり、普及活動の効果を実感することができました。

おわりに

博物館法の改正により、博物館は地域の多様な主体との連携・協力によって文化観光などの推進を図っていくことが努力義務とされました。今後、普及活動の意義はより大きく、地域に根差したものになっていくと予想されることから、他館の取り組みについての情報収集や意見交換を通じて、市民の興味やニーズを捉えた取り組みを実施していくことが課題であると考えます。

関連的な博学連携 ―生徒も先生も学芸員も一緒に学ぼう―

清瀬市郷土博物館 笠原 春菜

はじめに

清瀬市郷土博物館は、毎年市内市外含め約10校の小中学校見学や出前講座を引き受けており、数年前からは市内小中学校教員の研修にも協力している。こうした活動は決して清瀬市独自のものではないが、他館の具体的な活動内容を知る機会は少ない。そこで、清瀬市郷土博物館における近年の学校を対象とした普及活動を準備から実施まで含めて紹介する。限られた時間と人員で回転させる学校見学や、教員を対象とした普及活動について参考になればと考える。

社会科「昔の道具」の学習の対応（見学・出前講座）

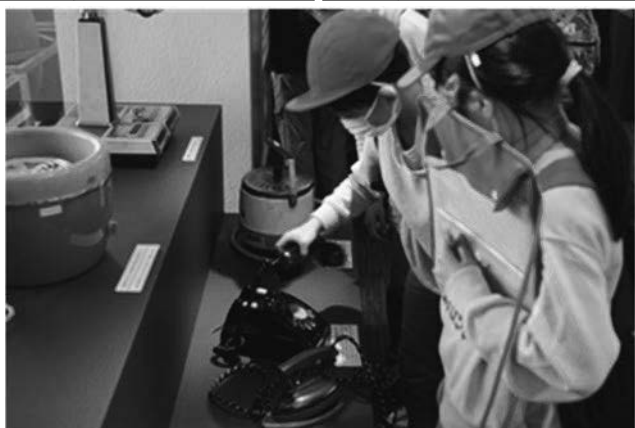
年度末になると、この学習に対して小学校3年生の見学・出前講座の希望が相次ぐ。学校によっては市の移り変わりや公共施設の紹介もほしいなど、同じ単元でも各校内容に差異がある。そのため、郷土博物館では日程調整・打ち合わせ・当日と順番に対応している。

日程調整は希望日時を第3候補までもらい、学芸員の勤務日や他校との調整を図る。打ち合わせは、学習計画書兼見学申込書を事前に記入してもらい、学習目標や事前学習内容を汲み取り、当日の行動計画を組む。表1はその一例であり、主に学芸員2人によって1クラス1時間に対応している。見学を1クラス制にしたのはコロナ禍以降、密集を忌避してのことであったが、落ち着いて見学できることから現在も継続している。

当日、伝承スタジオでは触る体験を中心に、展示ホールではク

表1 学校見学タイムスケジュール例 表2 出前講座タイムスケジュール例

約10分	集合・トイレ・挨拶		1分	挨拶
10～20分	A班	B班	20分	衣の道具解説 (火のし・電気・スチームアイロン)
	伝承スタジオ (学芸員1)	展示ホール (学芸員2)		食の道具解説 (羽釜・ガス・電気炊飯器)
10～20分	展示ホール (学芸員2)	伝承スタジオ (学芸員1)		住の道具解説 (黒電話・プッシュフォン・携帯電話)
10分	自由見学		15分	体験時間
約15分	質疑応答・挨拶 トイレ・解散		5分	質疑応答・挨拶



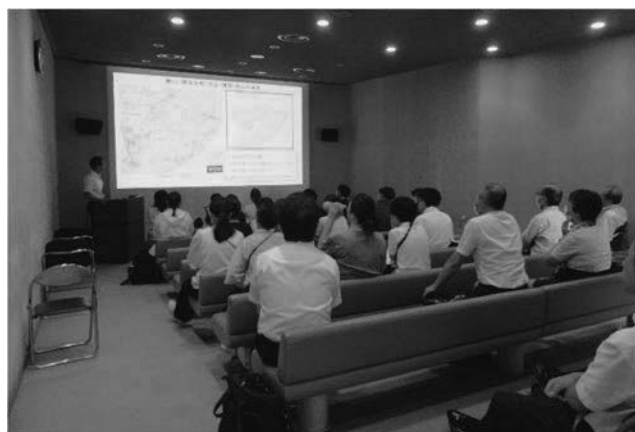
学校見学の様子 展示ホール昔の道具コーナー（令和6年）

イズ形式の解説を中心に展開し、学校の希望によっては自由見学時間も設ける。展示ホールには昔の道具コーナーを設けており、時代順に民具や家電など衣食住に関わる道具を展示している。概ね全ての道具が自由に触ることができる。出前講座の場合、その展示している道具から一部を選抜し、表2のスケジュールで解説・体験を実施する。近年学校からは、生徒の自主的な学びや実際に触れる体験的な要素を求められることも多く、それに対応し双方向で会話する解説や道具に触る時間を重視している。

清瀬市教職員研修への協力

生徒に限らず教員を対象とした活動も行っている。教育部教育指導課は教員を対象とした研修を年に複数回開催しており、郷土博物館ではその一部に協力している。例えば、清瀬市に初めて赴任した教員を対象にした研修では、教員の方々に来館してもらい、市の特色に特化した歴史講座や展示解説を行っている。別研修では市内の史跡を巡るマチ歩きも開催しており、学芸員が実際に引率し解説を行っている。活動を通し、教員が生徒に地域の情報を発信できるよう努めている。

子どもや外部の視点から見た清瀬市がどう映るかなど、我々が教員から教わることも多い。また、社会科見学以外に、授業の学びを深めるためなどに博物館を利用してもらえる契機にもなっている。



初任者研修の様子 学芸員による歴史講座（令和6年）

おわりに

以上、生徒に加え教員も学ぶ関連的な普及活動を紹介した。学芸員も教員も多忙な中、こうした博学連携は既存のカリキュラムに博物館利用を上手く取り入れるなどの工夫によって成り立っている。今後の課題は、これら事業を改善しながら継続することである。連携したものの、担当者が交代すればなくなってしまいうということも少なくない。恒常的な手続きはマニュアル化し敷居を低くし、お互いの意見やニーズを交換する時間に重きを置き、内容を柔軟に変化させていく姿勢が求められる。

博学連携においてどちらかが一方的でなく、生徒、先生、学芸員の互いが学びを深められる活動を今後も目指していきたい。

ミュージアムアーカイブズ活用に向けた取組み

立川市歴史民俗資料館 漆畑 真紀子

新型コロナウイルス感染症により社会生活に制限が課され、当館および川越道緑地古民家園も2回、一般公開を中止する措置を取りました。感染症予防対策を取りつつ再び開館・開園してからも、「3密」(密閉・密集・密接)を避けるための工夫、受け入れ態勢、来館・来園制限など、見直しをかけざるを得ませんでした。「ミュージアム多摩」第42号(特集—コロナ禍の博物館、令和3年3月発行)拙稿で、このような時期に資料整理や保存活動など「アフターコロナ」に向けた事業のための準備期間に充てたい、と記しました。あれから3年、その間に当館で行った事業とその現状について述べたいと思います。

教育普及活動事業の現状

体験学習は、新型コロナウイルス感染症が第5類に移行するまで全般的に参加者の人数制限を設け、郷土食の体験学習については参加者による調理や試食を中止して講師によるデモンストレーション形式での開催としました。それから随時、調理行程のみの体験、試食も再開し、元の実施方法へと戻したことで人気だったイベントに活気が戻りました。

一方で、コロナ禍に厳格な人数制限を設けて実施した結果、元の開催方法に戻しても客足が遠のいてしまったイベントもあり

ます。現在、次年度へ向けて開催方法の見直しやイベント・体験学習のあり方を模索している所です。

◀賑わいを取り戻した食文化の体験学習(令和6年6月撮影)



学校の団体見学は、コロナ禍を契機に小学校が来館・来園することが少なくなりました。もともと団体見学時に行っていた「昔の道具」の授業が、当館職員・学術支援ボランティアが資料を学校へ持ち込んで行う出張授業にとって代わり、その回数が格段に増加しました。1クラス1コマをかけて授業を行うことで内容はより充実し、生徒の修学度が向上、先生方から喜ばれることも多くなりました。一方で、出張授業が3学期の短期間に集中するため、学校に持ち込む資料の消耗が目に見えて著しく、教育普及活動と資料保存活動のジレンマに陥る状況にあります。また、小学校の来館・来園者数が大きく減少していることから、出張授業とは別に、以前のように団体見学として来館・来園されるような、学校に対する働きかけや工夫の必要性を切実に感じています。

地域連携としては、例年コラボレーション事業を展開していた国立国語研究所オープンハウス「ニホンゴ探検」が今年4年ぶりに開催され、地域の資料館として「立川の桑苗生産と養蚕文化」と題し出張展示を行いました。今年は来場者数が爆発的に増加し、会場全体で1,000人以上を数え、当館展示ブースだけでも参加者が例年の4倍と大いに賑わいを見せました。研究所関係者だけではなく地元市民も参加されていたようで、資料を使

っている体験コーナーなどは長蛇の列ができていました。

その他、市内中学校の「地域訪問」学習や博物館学芸員実習の受け入れ、立川市史編さん事業の進行に伴い、資料の収集(寄贈資料)・閲覧・複製・貸出、レファレンス等の一般の方の利用数も年々増えており、コロナ禍前のペースに戻りつつあります。

コロナ禍を経ての新たな試み

これまで普及活動事業・文化財保護活動にご尽力いただいた年中行事や郷土の民俗芸能に詳しい地域のご高齢の講師がコロナ禍のイベント休止を機に辞められることが増えてきました。生活様式の変化で地域の生業や年中行事が先細り、担い手となる後継者も少なくなってきました。その代わりとなる地域文化にまつわるイベントや体験学習を企画していかなければ、今年度5月から6月にかけて市民協働プログラムの一環として、試験的に養蚕事業を始めました。



▲本館エントランスに設置した飼育容器
カイコがマコを作る様子▶
(マブシはトイレットペーパーの芯)

ミュージアムアーカイブズ活用に向けた取組み

コロナ禍では対外的な教育普及活動に制限がありましたので、資料保存の環境整備や利用頻度の高い資料の電子化を中心に進めました。18mm・36mmなどの映像フィルムの保存クリーニングおよびデジタル化、台紙付き写真のデジタル化、フィルム保管用低湿度調湿庫や保存環境測定のための温湿度データロガーも導入しました。現在も所蔵資料の公開を前提とした整理作業を行っているところですが、同時にハードウェア整備も進めています。昨年度にはミュージアム展示ガイド「ポケット学芸員」(無料アプリ)を導入、令和6年1月4日より一部資料を公開しています。今後は収蔵品検索システムの外部公開へ向け、資料目録の更なる充実化を図るべく、整理作業を進めています。

あわせて重要性の高い非現用文書の取扱いについて、関係部署と協議を進めています。近年、社会活動が戻ってきていることで所蔵資料の利用件数も増えており、特に戦後80年、砂川闘争から70年を前にして、立川飛行場や立川基地関係の近現代文書の利用申請が増えているように感じています。当館所蔵の近現代文書については劣化も顕著なため、今後より多くの方々に資料を活用していただくためにも、優先順位をつけながら電子化を進めるなど、随時対処していきたいと考えています。

檜原村郷土資料館の近況報告

檜原村郷土資料館 清水 達也

はじめに

令和6年度の檜原村郷土資料館が携わったイベントとして、古文書ワークショップと第3回檜原村歴史探求イベントが開催されましたので紹介いたします。

古文書ワークショップ開催

令和6年8月22日(木)午後1時から檜原村役場3階301会議室において、村より文化財保護アドバイザーを委託している西村慎太郎氏と同氏が代表を務めるNPO法人歴史資料継承機構じゃんぴんの方々のご協力により、かねてより実施したいと考えていた「古文書ワークショップ」を開催しました。

第一回である今回は、古文書や古書籍などの扱い方などを学び、自宅や倉庫などに埋もれてしまっている物などを整理する際の知識として、また、村より西村氏に委託している文化財保護アドバイザーについて、どのようなことをしているのかを知ってもらう機会として、実際に資料館に収蔵している古文書を使って目録作成の体験をしてもらいました。

一般参加者は16名で4つのテーブルに分かれ、1つのテーブルに参加者4名と補助員1～2名で行いました。

まずは、西村氏より管理番号をつけることや、表題などがどのあたりに書かれているかなどについて、配布資料の目録作成マニュアルを見ながら解説、参加者にはそれぞれ1点の古文書を担当してもらい、記録表に表題・年代・形などを記入する作業を行いました。各自のくずし字の習熟度や古文書それぞれの難易度(くずし具合や癖)などにより判読するのが難しく、補助員の人手も足りなくなり待ち時間が出来てしまう参加者も見受けられました。



古文書ワークショップの様子

アンケート結果を見る分には「実物を使っの講座で大変良かった」など、おおむね好評で終えられたと思いますが、くずし字の読解部分で止まってしまう点が今後の課題であり、次回はくずし字の読解に焦点を当てた講座もよいかと考えています。

檜原村歴史探求イベント開催

令和6年10月26日(土)に檜原村文化財専門委員会による檜原村歴史探求～立山の道を歩く～を実施しました。

立山というのは、檜原村役場対岸の崖上にある平地で、そこへ通じる道(現在は天正の道とも呼ばれている)は古くから生活道として利用されており、口留番所や檜原城に関係してくる場所

あり今回の目的地です。

本宿の春日神社前駐車場を出発し、まず今回の立山の道のキーになる口留番所を見学、口留番所とは元和9年(1623年)將軍徳川家光の上洛の際に建てられ、江戸警備のため古甲州道でもあった檜原谷の通行を監視し治安を守る役割がありました。

続いて、日枝神社の解説を行ったあと、橋を渡って立山の道入口に到着、山道の入口にある八田野家は屋号を「名前屋(なめや)」といい、かつて通行人が名乗って通過したとも、名前を確認したとも言われているお宅の横を登っていき、20分ほど登り分岐をまっすぐ進むと目的地である立山の開けた平らな場所に到着します、ここからは吉祥寺や檜原城跡が見えます。

ここには岡部彦左衛門の屋敷があり、戦国期に居住していたと伝えられ、檜原城・水の久保山・立山で連携して檜原に侵入する敵に備えて、ここで見張りを行っていたと考えられている場所です、また、先の分岐から登ったところには昭和まで居住していた大久保家があります。

今回は檜原中学校側(反対側入口)道中の下りで道の一部に危ない箇所があったため行けませんでした、道は檜原中学校裏まで繋がっており、江戸時代に口留番所が出来てから明治に廃止されるまでの250年の間は番所を通らない抜け道として、それ以外の時期では生活道として利用されてきました。

その後立山をあとにし、来た道を戻って橋のところで階段を川まで下りていく途中に稲荷神社と檜原村指定の名木があり、川まで下りて行き橋について、昔の橋は南側で低いところにあったことや、この場所が御トウ(食に同)神事を行う際に体を清める川であることなどを解説、その後階段を上がって目の前の、岩船地蔵を見ながら春日神社へ向かい、春日神社と名木のケヤキ、御トウ神事で火をつける場所などの解説を行って今回は終了しました。



歴史探求イベント 立山から檜原城を見る

おわりに

当館から展示やイベントのため、ニホンオオカミの骨や林業道具、熊の剥製などの貸出を行いました。

また、これまでは文化財マップの中に資料館の紹介を載せていましたが、これをきちんと分けて新しい文化財マップと資料館単体のパンフレットを現在鋭意制作中です。

日野市郷土資料館の中学校・高等学校対応について

日野市郷土資料館 白川 未来

はじめに

日野市は人口 18 万人、小学校 17 校、中学校 8 校、特別支援学校（小・中・高）1 校、都立高校 3 校といった規模の市です。そのような状況であり、社会科見学、出張授業、職場体験、グループでの校外学習など、学校から郷土資料館への依頼は、例年希望を断らずに対応できる件数となっています。

中学校以上の郷土資料館利用促進については課題となっており、高校では近年特別支援学校のみです。郷土資料館協議会でも、郷土資料館が果たせる役割があるのではないか、としばしば話題にあがります。中学校・特別支援校を中心に、コロナ禍前後の状況も含めて当館の学校利用について報告します。なお、今回の表で示したように全体数が少ないため、およその傾向からの紹介となります。

令和 5 年度の小学校から高校までの郷土資料館利用状況

令和 5 年度の学校利用は、小学校団体見学は 6 件、小中合同体験学習 2 件、小学校出張授業 9 件、中学校職場体験 4 件、中学校校外グループ訪問 2 件、特別支援学校高等部見学・出張授業各 1 件でした。小学校は、学年単位で出張授業や、社会科見学で日野市を学ぶ機会があるため、郷土資料館は人数で考えると小学校への貢献度は高いといえるでしょう。

中学生の職場体験など職業に関する授業の支援について

例年当館では、中学校からの依頼として 2 日間 6 人前後の職場体験を受け入れています。2 学年の生徒が一斉に市内の事業所や公共施設などに分かれて職業体験を行います。博物館の仕事を体験してもらうことで、生徒は様々なことを学びます。展示を見るだけでなく、その展示に至るためにどのような裏方の仕事があるのかを体験するのです。資料の収集・保存・調査・展示・教育普及などの体験では博物館がどのように社会に貢献しているのかを伝えることができます。資料を取り扱えば、資料の大切さやモノから何を読み取ることができるのか、資料がなぜ大切なのかを実感する機会となります。また、将来の「自分」の生き方を考える際には、職業だけではなく、学びの場・憩いの場として博物館があるということを伝えることもできます。僅かな人数の受け入れですが、職場体験は、博物館そのものについて、子どもたちに伝える絶好の機会となっています。

職場体験としては、冊子類など扱い易い時代の資料や、化石・民俗などの資料整理や、ミニ展示の写真選択、展示物の清掃、訂正シール貼りといった事務的なことも含め、その時々が多岐にわたる仕事を体験しています。

多い年で市立中学 8 校中の 5 校を受け入れましたが、コロナ禍 R2.3 年度は職場体験の受入がありませんでした。この時期の中学校は、学校への講師招待、短時間の訪問インタビューなどの代替策をとっていました。

郷土資料館が実施した職業に関する中学校支援

	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
体験	2	1	4	4	2	0	0	5	4
訪問	0	0	0	0	0	1	1	0	0
出張	0	1	0	0	0	1	0	0	0

体験：2 日間の職場体験

訪問：来館して職業についてのインタビュー

出張：学校へ出張講座や対談

グループ学習、施設訪問、テーマのある学習での展示見学

日野市内外の中学校、市内高校の来館（職場訪問を除く）

	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
市内中	2	2	2	4	5	0	0	3	2
市外中	0	1	1	3	2	1	0	0	0
市内高	0	0	0	0	0	0	0	0	1

グループでの校外学習では、6 人前後の中学生が、公共交通機関を使って見学に訪れます。市外では、東村山市、東大和市、多摩市、青梅市、八王市市といった近隣や多摩モノレール沿線の市からの来館がありました。しかし、市外からの来館はコロナ渦で中断し、その後の予約訪問は途絶えています。

市立中学校の場合、生徒がグループ毎に対象テーマや質問内容を決めるようで、内容により来館の有無やグループ数が変わってきますが、例年ほぼ同じ中学校からの来館があり、日野に関することや施設の役割についての質問が中心です。

高校の事例は市内の都立特別支援学校高等部のみでした。日野市について学ぶ学年単位の学習で、出張授業と来館がセットになっています。当館の徒歩圏にあり、令和 6 年度も同様に実施され、この授業が契機となり連携が進むことを期待します。

小規模なれど大切にしたい中高生の学びの機会

以上紹介した事例のように、中学校・高等学校による資料館利用は、小規模なものが主流です。そのため個別の相談に応じた柔軟な対応が可能です。登校が困難な生徒や配慮の必要な生徒が職場体験に参加することもありました。仔細は伝えられませんが、学校からそれとなくお願いの電話が来ることもあります。特別支援学校は、生徒に何をさせて、どんな課題が可能なのか、下見や事前調整は非常に丁寧に行われます。職員にとっても様々な来館者への学びの環境を考える機会ともなりました。

当館は、学校側が必要とする素材を沢山持っています。しかし日頃の業務に追われて、積極的な一歩を踏み出せていないのが現状です。学校の依頼を受けて対応することに加え、学校利用の事例紹介、教員の研究会でのヒアリング、利用案内の発信などがあれば、当館が果たせる役割が増していくでしょう。中高生の学びの機会を大切にしたいです。

日野宿本陣の建造物調査とクラウドファンディング

日野市立新選組のふるさと歴史館 金野 啓史

はじめに

日野市日野本町地区は、かつて甲州道中の日野宿として栄え、都内に唯一現存する本陣建築として、日野宿本陣がある。日野市ではこの建物について、クラウドファンディングで寄付を募り、令和5年度から6年度かけて建造物調査を実施した。本稿ではその経過と結果について紹介したい。

日野宿本陣

甲州街道日野宿の中央部には、交替で名主を務めた上佐藤家、下佐藤家と通称される二軒の佐藤家があり、正徳6年(1716年)に西側の上佐藤家が本陣、東側の通称下佐藤家が脇本陣と定められ、幕末期には下佐藤家も本陣をつとめた。

これらは嘉永2年(1849年)の大火により焼失したが、現在日野宿本陣として残る下佐藤家は、元治元年(1864年)に再建された。建物は瓦葺きの総檜造りで、中央に式台を伴う玄関が設けられている。なお、この建物で最も格式が高い上段の間は、明治26年(1893年)移築され、日野本町に現存している。

屋敷と敷地は昭和26年(1951年)に個人に買い取られたが、平成16年(2004年)には市の所有となり、現在は新選組のふるさと歴史館の分館として一般に公開されている。

調査の経緯とクラウドファンディング

日野宿本陣は日野宿の歴史・文化のみならず、宿駅制度を理解するうえで重要であるため、東京都指定史跡と日野市指定有形文化財および史跡に指定されている。また、幕末期の当主佐藤彦五郎が天然理心流の剣術道場を開き、日野の土方歳三、井上源三郎のほか、近藤勇や沖田総司ら後の新選組を結成する人々が共に稽古に励んだ、新選組の原点とも言える場所であり、文化財としてだけではなく、観光の目玉ともなっている。

日野市はこの建物と敷地を取得した後、公開に向けた整備は行ったものの、保存に向けた改修は未だなされていない。しかし近年、災害に対する危機感は高まっており、台風は大型化し、巨大地震の発生も懸念されている。地域のランドマークともいえるこの建物が、もしも巨大災害によって失われたなら、市民の喪失感は大きなものとなる。

そこで日野市では、日野宿本陣の次世代継承のため、まず令和5年度に建造物調査を行って建物の現状と保存上の問題点を明らかにし、この結果をもとに保存・整備計画を策定し、文化財としての保存に必要な改修を段階的に実施する『日野宿本陣』を未来に残すプロジェクト』を立ち上げた。

日野宿本陣のような歴史的建造物を未来に残すためには、行政だけでなく、市民をはじめ、日野宿本陣や新選組に想いを寄せる方々の力を結集することが大切である。また、財源が必要である。このためクラウドファンディングにより寄付を募って実施することとした。ふるさと納税サイトを利用し、令和5年4月3日から12月29日まで寄付を募った結果、延べ141人から、総額2,609,000円のご支援をいただいた。

建造物調査

日野宿本陣の建造物調査は、令和5年度と令和6年度の2期にわたり以下の調査を実施した。

①地盤調査：既存基礎や地業の形状、深さ等を把握する試掘調査のほか、地盤面から砂質・礫層までの盛土層厚のムラや盛土層の硬軟等の状況を調査するスクリーウェイト貫入試験、および既存基礎の支持地盤の支持力度を測る平板載荷試験を実施した。

②建物調査：建物全体を対象に、小屋裏、床下を含む各部分・部位について劣化状況を調査した。また、柱の傾斜測定と不陸測定を行い、建物全体の変形状況を把握した。

調査の結果とこれから

建造物調査の結果、以下の事項が明らかになった。

地盤調査：日野宿本陣の地中約1.2m以下は往かつての多摩川の氾濫によると考えられる砂礫層となっているが、木造建造物を支えるには十分な耐力があることがわかった。

建物のゆがみ、傾き：建物全体が西に向かってやや傾斜していることがわかった。

劣化状況：現状確認調査の結果を踏まえ、劣化状況等を基に修理の緊急性について診断し、建物を維持するうえで緊急性を要する劣化箇所はなかったが、部材のズレなどが散見された。

日野宿本陣は比較的健全な状態にあることが明らかになったが、この結果を踏まえて保存・整備計画を策定し、建物の文化財としての価値を損なわないことを最優先に、改修、整備を段階的に実施していきたい。

また、建造物調査を市費で行ったうえで、それに基づいた改修等の費用をクラウドファンディングで寄付を募ることが一般的で、今回のような建造物調査に寄付を募る事例は稀だと思われる。だが、財政状況の厳しい昨今にあっては、このようなやりかたもありだったのかなと、今となっては感じている。



日野宿本陣

「江戸の糸あやつり人形」の調査・普及活動

小金井市文化財センター 佐賀 拓実

はじめに

小金井市文化財センターの令和6年度の活動は、3月23日から5月26日まで、季節展「名勝小金井桜」を開催、11月1日から12月28日まで、企画展「小金井桜と武蔵小金井駅」を開催、当館での講座や他館へ出張講座、外部の講師を招いた地域史講座などをそれぞれ実施いたしました。

また、令和6年度は、小金井橋を中心とした玉川上水堤兩岸に広がる桜並木が、大正13年(1924)12月9日に「小金井(サクラ)」として国の名勝指定を受けてから100年の節目となることから、各種のイベント・式典が執り行われました。

さらに、本年度より開始した民俗文化財の調査・普及活動について、以下ご紹介します。

江戸の糸あやつり人形

「江戸の糸あやつり人形」は、人形浄瑠璃で見られる三人遣いの形式とは異なり、基本一人の演者が一つの人形を、糸が繋がっている「手板」と呼ばれる操作板にて操り、人形を動かします。

「東京都の無形文化財」、「国による記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に指定されており、現在小金井市で、「結城座」によって継承されています。「結城座」は、伝統的な江戸の糸あやつり人形の劇団で、現在までに第13代目の結城孫三郎が襲名し、糸あやつりを今に伝えています。演技の手法は、物語の台詞を人形遣い自らが発声しながら進行するといった、独特なものです。無形文化財であるゆえに記録作成は急務でした。

調査については、令和6年度から予備調査が始動し、令和7年度以降に調査検討委員会を立ち上げて本格的な調査を行い、最終的には民俗調査報告書の作成を目指しています。各地で伝承されてきた糸あやつり人形が、継承者の不足などにより減少・廃絶してしまった背景があり、この伝統的な芸能を後世に伝えるためにも、綿密な事例・記録を書き残す意義が強くあります。

令和6年11月現在までの成果として、人形の首(かしら)の調査を行い総数は約1500個、併せて関連する文献の随時収集を行ってきました。首は、老若男女多種多様で、目や口が動いたり、首の正面が刀で切られた様に二つに割れたりするといった特殊な仕掛けを持つものなどがあります。各首は、前後左右の写真を一枚ずつ撮り、回転台を用いて一周回した動画を撮影し、データとしても保存しています。また、首の調査の合間に、人形の胴などの調査をする中で、構造や材料の変遷など、興味深い箇所が多くありました。文献についても、江戸時代の番附や公演記録、各人の随筆や自叙伝、雑誌などから、当時の糸あやつり人形の様子を垣間見ることができる資料の収集を試みています。

今後の調査については、衣裳や小道具、当時のチラシ・パンフレットなどを調査しつつ、人形の遣い方や所作、作成過程など、幅広い分野の視点なども意識しつつ臨む次第です。

おわりに

各々の時代において、どのように糸あやつりが興行され、受容されてきたかを調査することは、当時の世相や暮らしを考えることの一步となります。この調査を通して、糸あやつりの世界の一端を明らかにしていきたいと考えています。

また、今後の活動について、民俗報告書の作成にあたり、調査研究を進めると同時並行して、地域住民に向けた機運醸成の様々な事業を行い、普及に努めて参ります。直近では、令和6年(2024)11月2日に、小金井市教育委員会が共催となり、小金井公演として、渡辺えり氏の作・演出「星の王子さま」が公演され、来場者数は、定員300人のところ約280人の方々が訪れました。この公演では、小金井市内の小学生も劇中の人形遣いとして参加し、熱心に演技をしていました。

古典の演目だけではなく、新作の演目へも力を入れている「結城座」の舞台芸術の創造性を強く感じられました。地域の芸能・文化を身近に感じてもらうためにも、今後とも調査・普及活動を進めていきたいと考えています。



写真1 人形首(かしら)の保管棚

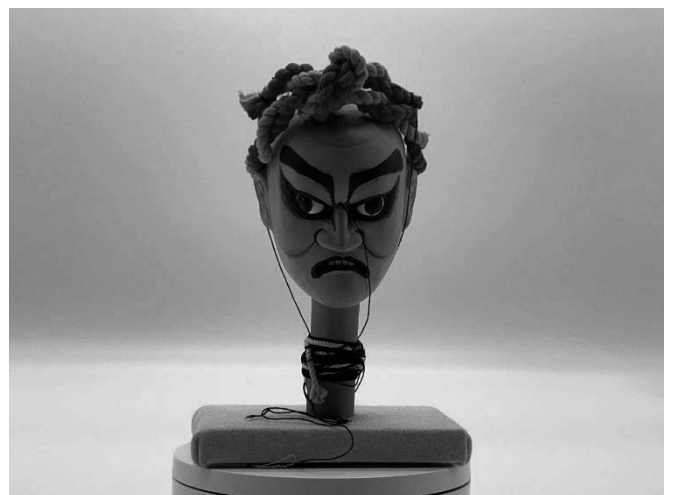


写真2 人形首(かしら)正面の撮影

近年の普及活動を振り返る

くにたち郷土文化館 安齋 順子

はじめに

ミュージアム多摩No.43 の特集テーマ「博物館のウィズコロナ・アフターコロナ」では、2021 年のくにたち郷土文化館（以下、郷土文化館）の様子を振り返り、オンラインを活用した取り組みなどを紹介しました。ここでは、その中で市民団体が関わる普及活動を中心に、近年の変化や取り組みについて紹介します。

くにたちの暮らしを記録する会と民具案内

1979 年、社会教育課の呼びかけに応じ結成され、民具の収集・聞き取り調査を行った市民団体に「くにたちの暮らしを記録する会」（以下、記録する会）があります。郷土文化館では、この会に委託する形で開催している事業がいくつかあり、その中に「民具案内」と呼ばれる事業があります。民具案内は小学校3年生の社会科の単元に合わせ、行灯、燭台など、あかりの道具体験、タライと洗濯板を使った体験、しょいばしご、モッコなどを使った運ぶ道具の体験など、様々なむかしの道具を実際に体験するものです。また、「むかしのくらし質問タイム」では、児童の質問に会員が答え、まちの様子や生活の移り変わりを紹介してきました。

しかし、2020 年度から新型コロナウィルスが広まると、この年度は、記録する会が参加しない形で職員のみで実施しました。2021、2022 年度には、道具の体験は引き続き職員のみで行い、「むかしのくらし質問タイム」を、小学生と別部屋にいる記録する会とをリモートで繋いで質問の受け答えする形で行いました。

2023 年 5 月には、新型インフルエンザ感染症が「五類感染症」に移行したため、徐々に活動をもとの状態に戻し、対面での質疑応答を復活させました。リモートでの開催は、会員からも「子どもたちの表情がわからない」「質問が聞きづらい」などの意見も出されていたため、この事業に関してはコロナ禍前に戻る形で落ち着いているところです。



2023 年度 民具案内（洗濯体験）

コロナ禍に撮影した記録映像の活用

コロナ禍に、開催出来なかった事業も多くありますが、いままで出来なかったことが出来た時期でもありました。それは、記録

する会の活動の動画記録です。記録する会は郷土文化館において、前述の民具案内の他に、「わらぼうり作り（わら細工教室①）」「しめ縄飾り作り（わら細工教室②）」「十五夜団子作り」「まゆ玉飾り作り」「菱餅作り」を行ってきました。これらはコロナ禍に参加者を募っての開催を休止していましたが、この休止期間に、会員だけで実施し、その様子を動画に撮影させてもらいました。この動画は編集し、郷土文化館の YouTube チャンネルで見ることができ 動画：しめ縄飾り作り



わら細工伝承サポーター

館の活動に不可欠である記録する会は会員の高齢化がかねてからの課題でした。コロナ禍を経て、会の活動が弱まる中で、新たに取り組んだ活動のひとつに「わら細工伝承サポーター」の立ち上げです。これは、記録する会が実施する行事のうち、年 2 回行われている「わら細工教室〔わらぼうり作り・しめ縄飾り〕」を、サポートしてくれる市民や有志を募って実施したものです。

開催の流れは、【広報での募集→説明会（趣旨の説明・国立についての解説）→練習（サポーターのみ）→練習（くにたちの暮らしを記録する会と合同）→イベント当日（記録する会のサポート・イベント参加者への指導）】といった形で行いました。（現在、子ども 2 名を含む 9 名参加）

練習では、先に紹介した記録する会が作業する YouTube 動画を活用し、サポーターのみで一通り作り予習をし、その後、記録する会との合同練習において、細かな確認などを行いながら学んでいきました。

今年の冬で、わら細工伝承サポーターの活動は 2 年目を迎えます。まだまだ手探りの 2 年目ですが、普及活動には欠かせない市民の力を育む場を作っていきたいと思います。



わら細工伝承サポーター（練習日）

里正日誌活字本完成と関連事業について

東大和市立郷土博物館 阿部 道子

里正日誌とは

「里正」とは中国の郷里制に^{さとおさ むらおさ}里長、村長を示す言葉であり、里正日誌は、武蔵国多摩郡蔵敷村（現東大和市蔵敷）の名主であった内野左衛門（当時の内野家の世襲名）が、幕末から明治にかけて同家に残る幕府から廻状、新政府の布達、村からの差出状等の写しを編年体で編纂したものです。原本は東大和市蔵敷の内野家に所蔵されています。

記述された年代は、天正元（1573）年から明治6（1873）年の300年間にわたり、全69冊（現存するのは68冊）にまとめられました。



奈良橋村絵図

天正から江戸初期の記述内容については、慶長年間の「武家諸法度」や近隣地域の金石文の写しなどを中心とした物にとどまりますが、江戸後期以降の記載内容については、幕府廻状の写し（一般に言う「御用留」）や蔵敷村からの差出状、近隣各村の対応等が書き残されています。特に幕末、明治期のものは同時進行で記述されていると考えられ、貴重な歴史資料となっています。

その歴史叙述の価値がきわめて高く、東大和市に限らず、近隣市町村史の編纂はもとより、埼玉県史、神奈川県史の編纂にも多くが引用されてきました。

そして、昭和55（1980）年には東大和市の文化財に指定されました。



里正日誌活字本全13巻

30年ごしの里正日誌活字本事業

当初、「里正日誌」の活字本刊行事業は、平成6（1994）年か

ら毎年1巻ずつ刊行する予定でした。

ところが、3巻（第9巻・第7巻・第10巻）を刊行した平成8（1996）年以降、市の財政状況の悪化を主な理由として刊行事業は中断されてしまいました。

その後、18年が経過した平成26（2014）年に関係者の努力もあって、刊行事業は再開され、以降毎年1巻ずつの刊行が続けられ、令和5（2023）年に全13巻の活字本刊行事業は完結しました。

講演会「『里正日誌』で明らかになったこと」

令和5（2023）年9月23日（土・祝）午後1時30分から、当市中央公民館ホールで、講演会「『里正日誌』で明らかになったこと」を実施しました。

これは四半世紀以上にわたる歳月を費やしたこの大事業の完了の一つの証として残すこと、この間の編集校訂委員、及び解読員の皆様のご尽力に感謝の意を表すること、そして何よりも里正日誌の歴史的価値、及び活字本刊行事業終了を広く周知するために行ったものです。

当日は活字本事業に監修をいただいた森安彦氏（国文学研究資料館名誉教授）に挨拶をいただき、藤田昭三氏（東大和市文化財専門委員）に記念講演をしていただきました。

ほぼ満席の98名が参加し講演会は好評のうちに幕を下ろしました。



令和5年9月23日の講演会の様子

郷土史講座「『里正日誌（活字本）』を読んでみよう」

令和6（2024）年も里正日誌の普及活動を継続し、今年は9月から3月まで全7回の郷土史講座を実施しています。

砂田さと子氏（東大和市文化財専門委員）を講師とし、約半年をかけて里正日誌第1巻を読み下していきます。第1巻は天正元（1573）年から延享4（1747）年の資料が記されており、高木村の始まりから、その中で蔵敷村が蔵敷分として認められる様子を読み取ることができます。

募集定員20名を越えて23名の申込みがあり、執筆時点で第3回が無事に終了したところです。今後も里正日誌を伝えていく活動を継続したいと考えております。

コロナによる変化～古文書講座と植物観察会のかたち～

パルテノン多摩ミュージアム 橋場 万里子・仙仁 径

はじめに

新型コロナウイルス感染症による変化にともない、当館でも以前と異なる形で実施した事業がありました。それらは、感染症分類が変更された後も元の形態にはもどらず、新たな事業の形として定着しつつあります。また、コロナ禍により顕在化した別の課題もあります。ここでは、当館の事業の中から、古文書講座、植物観察会を例に取り上げてコロナによる変化とその後をご紹介します。

◆コロナをきっかけに変化した古文書講座

コロナ禍以前の当館の古文書講座は 100 名を収容できる大型会議室にスクリーンを立て、講師の話を聞く形式でおこなっていました。毎回 100 名以上の応募者があるため落選者を出さざるを得ず、当選者も 3 人掛け席にびっしりとお座りいただく状態だったため、参加者からは不満が出ていました。また、後ろの席ではスクリーンの文字や板書が見えにくく、講師の声も聞こえにくいなどのお声もいただいていた。

コロナ禍の時期は、当館の大規模改修による休館が重なり、休館中の古文書講座は公民館の一室を借りて実施しました。会議室は中規模となり、人数制限により収容可能人数が 30 名とおおよそこれまでの 1/3 となっていました。そこで将来的に考えていた計画を早めて、令和 2 年（2020）よりオンライン併用の古文書講座を実施することになりました。

◆オンライン講座の効用

オンライン併用講座は、従来の講座における課題を一部克服することにつながりました。

まず、オンラインでは画面が自身の端末で間近に見られるため「画面が見にくい」という苦情がなくなりました。また、音量も自身で調節できたため、難聴の方に喜ばれました。妊婦の方や引っ越して遠方にお住まいの方も参加を継続することができるようになりました。さらに、見逃した方向けの動画配信をおこなったところ、これまで講座の実施日に都合が悪く参加を見送っていた方も動画を利用できるようになり、また、講座の進行についていけなかった方が復習に使うようになりました。

もちろん会場での臨場感は何ものにも代えがたいものですが、オンラインや動画配信への需要は次第に高まり、現在では応募者の半数以上がオンラインを第一希望にしています。

◆変化する「講座」というコンテンツ

従来、博物館の講座はリアルタイムの生ものであり、博物館が設定した時間に合わせて皆が集合して受講するものでした。しかし、古文書講座の動画配信はそれを変貌させました。講座がひとつのコンテンツとなり、参加者の都合に合わせて、参加者が見たいときに見られる、より個人的なものになったように思えます。コンテンツ化することには弊害もあり、すべての講座にふさわしい形態とはいえませんが、より多くの人が当館講座に触れられる形のひとつとしてオンライン講座は今後も必須のものになると考えられます。なお、コンテンツ管理や、動画配信がスタッ

フの属人的な力に依存している点など課題もあり、より永続的にできる形にしていける必要があります。

◆コロナの影響が続く植物観察会

令和 6 年度現在、世間では新型コロナウイルス感染症流行の影響が薄れてきましたが、当館で実施している植物観察会では、①コロナを機に生じた変化、②コロナによって顕在化した課題があり、その 2 点について紹介したいと思います。

まず①のコロナを機に生じた変化です。流行時は大勢で野外を歩き、講師の解説を聞きながら植物を観察することができなくなり、対策として「みんなの植物観察会」では事前申込制と定員制を導入し、受付時は手指消毒と検温を実施、観察では 10 人程度的小グループに分かれ、実施時間を短縮しました。令和 5 年の新型コロナ 5 類移行後、手指消毒と検温こそしなくなったものの、それ以外は継続しています。上級コースの「植物観察会ステップアップコース」では、対策として現地に集まっての観察を中止し、充実した内容の観察資料を参加者に配布し、各自で観察する方法に変更しました。新型コロナ 5 類移行を機に、現地で講師の解説を聞きながら観察する指導コース、新型コロナ対策で誕生した資料をもとに各自で歩く資料コース、そして観察しつつ運営サポートや植物の指導をしていた運営補助コースの 3 コースを創設しました。資料コースはコロナ対策を受け継いでおり、都合のいい時に自分のペースで観察できるのが特徴です。

次に②の課題についてご紹介します。みんなの植物観察会は市民団体の「多摩市植物友の会」と共同で実施していますが、新型コロナウイルス感染症の流行や高齢化により会員が減少し、観察会講師を担う幹事も減少しました。そのため、当日参加可能で、定員を設けない以前のスタイルでの実施は困難です。植物観察会ステップアップコースの運営補助コースは、講師となる人材の育成も目的の一つですが、残念ながら今のところ友の会幹事の増加には寄与できていません。また植物観察会ステップアップコースの新型コロナ対策から誕生した資料コースですが、地図をもとに植物を見つけるのは難しいことや、気軽に講師に質問ができないことなどが課題です。

新型コロナの流行は、植物観察会の新たな手法を模索する契機となり、部分的に事業の改善につなげることができました。一方、協力団体の幹事はこれまで緩やかに世代交代して維持されていましたが、新型コロナの流行によりそのサイクルが途切れてしまい、今のところ改善の見込みはたっていません。植物観察会が持続可能な形で事業を続けられるか、これからが正念場です。

黒部隆名誉教授 岩石・鉱物標本コレクション そのアーカイブ化活動と教育研究利用

東京農工大学科学博物館 上田 裕尋

はじめに

東京農工大学科学博物館では、2024 年 3 月に同大学農学部土壌学研究室に保管されていた「黒部隆名誉教授 岩石・鉱物標本コレクション」のデジタルアーカイブを公開しました。本稿ではこの岩石標本のアーカイブ化の過程での教育利用や研究について紹介いたします。

黒部隆名誉教授 岩石・鉱物標本コレクション

黒部隆名誉教授 岩石・鉱物標本コレクションは東京農工大学農学部生物生産学科土壌学研究室が所蔵している教材用標本群で、883 個の岩石標本から構成されています。そのうち 611 個は標本業者から購入した標本で、一部を除き標本情報が印刷されたラベルが付随しています。一方、残りの 272 個の標本は教員や学生などの大学関係者によって収集された標本と思われ、標本名や産地情報が手書きのラベルが付随します。この大学関係者によって採集された標本は、最も古くて 1893 年（明治 26 年）に採集されたものであり、ラベルや標本の状態、記載された情報から明治から平成まで断続的に収集されたと考えられます。

一部の手書きのラベルには「T.W.」や「T.Wakimizu」といった採集者のイニシャルがみられ、明治期の標本が基本的に東京帝国大学農科大学地質学・土壌学講座の教授だった脇水鐵五郎やその周辺人物が採集した物と分かりました。本学農学部の前身は帝国大学農科大学実科（東京帝国大学農学部実科）であり、本標本は当時の教材として土壌学担当教員が利用し、東京高等農林学校として独立後も標本を拡充させながら引き継がれてきたという歴史が推測されます。

黒部隆名誉教授 岩石・鉱物標本コレクションは、現在は土壌学教材としての役目を終え、研究室に保管されていました。2017 年度にこの標本の新しい活用方法の模索のために、デジタルアーカイブ化及び学芸員養成課程での利用が始まりました。

博物館実習と岩石コレクション

2017 年度、2018 年度の博物館実習（学芸員養成課程）の一環で、本コレクションの写真撮影とラベル情報のデジタル化を進めました。岩石標本は地質学の専門知識がないと、標本のどこにその岩石に特徴的な構造が見えているのか、なぜその標本を露頭から切り出したのかなどを推察することが難しいものです。どのような方向から撮影するのが適切か判断が難しい中、学生と撮影を進めることとなりました。そのため、あくまでデジタルアーカイブはどのような標本がコレクションに含まれているのかを共有することを目的に、標本の全体像が分かるような写真の撮影を進めていきました。また、ラベルのデジタル化も進められましたが、くずし字や筆記体が多用された手書きラベルは判読が困難なものも多く、標本情報の取得は難航しました。

2022 年度からは地質学・古生物学を専門とする筆者が東京農工大学科学博物館に着任し、標本そのものの同定とラベル情報の照合、判読不能部分の推定を進めていきました。この際に AI

くずし字認識アプリ「みを」（人文学オープンデータ共同利用センター）を活用し、判読を進めました。このアーカイブ化活動や AI と学芸員の知識を利用した手書きラベル判読については、2024 年 9 月に沖縄で開催された国際自然史標本保存学会（SPNHC）にて発表しています。

2023 年度の博物館前期(夏学期)では、本岩石コレクションをテーマに、来館者とサイエンスコミュニケーションを行うことを前提に各学生が興味を持った内容についての企画展示を制作しました。岩石標本がなぜ土壌学研究室にあったのかを解説する展示や学生の興味に沿った展示（石灰岩の形成と産業、化石動植物相の変遷、結晶と原子配列など）が展開されました。学生たちは 2023 年 8 月 27 日に開催された博物館イベント「サマーフェスタ 2023」の中で実際に来館者に展示を解説し、サイエンスコミュニケーションを実践してもらいました。来館者に実物を観察してもらいながら、地質学や古生物学、鉱物学の世界に触れてもらうとともに、学生たち自身が、市民と専門領域の間で、いかに両者をつなげるかというサイエンスコミュニケーションの役割の重要性と難しさを学ぶ貴重な機会となりました。そして 2024 年 3 月 15 日、先生方や博物館実習生、関係各所の努力の末、黒部隆名誉教授 岩石・鉱物標本コレクションが東京農工大学科学博物館デジタルアーカイブに公開されました

(<https://archives.tuat-museum.org/s/agriculture/page/rockmineral>)。



2023 年度博物館実習生による岩石コレクションの展示の様子

おわりに

黒部隆名誉教授 岩石・鉱物標本コレクションは一度、その教材としての役割を終えた標本たちになります。しかし、デジタルアーカイブの活動の中で博物館実習生への教材として活用し、その教材としての価値を復活させることができました。現在は各標本の歴史学や地質学といった学術的な価値の再発見について研究を進めております。今後も本標本コレクションの研究教育への利用を進め、博物館資料としての価値の向上を目指すことができたと考えております。

たてもの園事業の現在

江戸東京たてもの園 阿部 由紀洋

はじめに

新型コロナウイルス感染症が猛威を振るっていた中、江戸東京たてもの園は、都立動植物水族園や文化庭園などと同様の臨時休園措置となり、2020年（令和2）度においてはおよそ5か月間、2021年（令和3）度においてはおよそ4か月間の休園を余儀なくされました。これまで実施してきた体験型の事業に関しては、休園中は当然のことながら、かろうじて開園できた期間においても実施を見送らざるを得ませんでした。

2023年（令和5）5月の5類感染症への移行後は少しずつ体験型の事業を再開させ、現在ではほぼコロナ前の状態に戻すことができました。

当園の教育普及事業などの現状をお伝えいたします。

情景再現事業

当園では、街並みを活かした催しを年に5回、「情景再現事業」と称して開催しています。5月のこどもの日には、商店建築を移築している一帯でのおつかいゲームや昔の遊びの体験を行っています。この催しでは、農家で小動物を飼育していた様子を体感してもらうために、小動物と触れ合える催しを開催していましたが、コロナ禍で中断したまま今に至ります。こどもたちに人気の催しだったので、そろそろ再開を検討すべきかもしれません。

そして8月と11月には、夜間開園を行っています。8月は「下町夕涼み」と題して、射的などの縁日やこども神輿など、夏祭りの風情を楽しめる催しとなっています。一方の11月の夜間開園は、「紅葉とたてもののライトアップ」として、色づき始めた木々をライトアップしつつ、灯りが点いた夜の建物の様子をあじわってもらう催しです。当園のライトアップは、この時期各地で盛んにおこなわれるイルミネーションのイベントとは異なり、建物から漏れる灯りを活かすため、少し暗めのライトアップです。来園者には足元を照らすための懐中電灯を貸し出しているほどです。

年が明けて1月2日と3日には、お正月のイベントを開催しています。地元小金井に伝わるお囃子や餅つき唄を披露したり、獅子舞なども行っています。2日間とも入園料が無料ということもあり、多くの来園者でにぎわいます。そして成人の日には、新成人を対象にした催しを開催しています。

最後に3月には、3月28日の開園記念日にあわせて、「たてもの園フェスティバル」を開催しています。クイズラリーやヘブナーアーティストによるパフォーマンスなど、開園記念日を盛り上げる催しです。

情景再現事業を実施するにあたって、事業の内容を見直し新たな企画を盛り込もうと、毎回担当者が知恵を絞っています。例えば今年度は、「下町夕涼み」で小金井阿波踊りに参加する連に声をかけ、園内西ゾーンの通りを練り歩いてもらい盛り上がりを見せました。また、大学の落語研究会に依頼して、怪談噺を中心に寄席を開催し、好評でした。さらに「たてもの園フェスティバル」では、ここ数年東京農工大学にご協力いただきワークショ

ップを行っていただくなど、地域連携や他機関との連携を広げています。

「昔くらし体験」

当園では、10月より翌年の3月上旬の期間、近隣の小学3年生を対象とした教育プログラム「昔くらし体験」を実施しています。2001年（平成13）の開始以来、ボランティアが事業を担ってきましたが、コロナ禍によるボランティア活動休止以降、現在では職員が事業を運営しています。2021年（令和3）の再開以来、囲炉裏と火鉢の体験を行ってきましたが、職員自ら囲炉裏で火をおこし炭火を作って火鉢に移す作業をしたおかげで、薪で火をおこすスキルを身につけることができました。2024年（令和6）度からは、園内の商店建築が建ち並ぶ一帯でおつかいの疑似体験をしてもらっています。限られた体験時間の中で、小学生たちに今の暮らしぶりとの違いをどれだけ感じ取ってもらえるか、日々試行錯誤しています。

展覧会と博物館実習

コロナ禍によるものではありませんが、当園の本館である江戸東京博物館が、2022年（令和4）4月より長期休館となったのを受けて、当園で開催している展覧会で、本館が所蔵するコレクションを紹介する企画を行うようになりました。同年6月からの「江戸東京博物館コレクション—東京の歩んだ道」を皮切りに、これまで4回、テーマを変えて開催しました。本館でもなかなか展示する機会がなかった資料を紹介するなど、多彩なコレクションの活用を図りました。

また博物館実習についても、閉館中の本館に代わって当園で実施しました。通常、当園での実習は1日のみなのですが、ここ数年は全日程を当園で行っています。実物の資料を用いた展示の実習においても、当園保管の資料を使い、展示室北側に付属しているギャラリーに展示しました。展示後も数日間そのままとし、来園者に見ていただきました。なお、会場は当園ですが、実習生への指導等は本館の担当部署の職員が行っています。

おわりに

コロナ禍前までは、情景再現事業や昔くらし体験などはボランティアの協力が欠かせませんでした。現在は、ボランティア活動の負担を軽減するために、職員中心の運営となっています。

一方で、令和6年3月に、東京学芸大学との間で包括的な連携協定を結びました。それによって今後、学生たちが企画した教育普及事業の展開や、当園の事業での活躍が期待されています。

これからもより魅力的なたてもの園にしていきたいと思えます。

歴史資料室の職場体験

(公財) たましん地域文化財団 歴史資料室 坂田 宏之

はじめに

(公財) たましん地域文化財団では毎年、国立市立第一中学校、国分寺市立第三中学校、稲城市立第五中学校の中学 2 年生の職場体験を受けています。時期は 9 月中旬から 10 月上旬で、各校から 3、4 名の中学生が来られます。体験期間は 3 日間、事務局が半日、残り 2 日半は、歴史資料室・美術資料室で 1 日・1 日半を交代で担当しています。最近では初日の昼休み前に、職場体験に来た生徒さんたちからのインタビューが入ります。内容は各校ほぼ同じで「この仕事に就いたきっかけは」「この仕事のやりがい」「この仕事に向いている人はどういう人か」。歴史資料室から 1 名、美術資料室から 1 名が中学生からのインタビューを受けています。

歴史資料室では、実際に資料に触れつつ、新聞記事スクラップの選定・pdf スキャン作業や、絵葉書資料のスキャン作業などを生徒さんたちに体験してもらっています。次章ではその内容を中心に紹介します。

歴史資料室、職場体験の実際

歴史資料室の職場体験のねらいは「資料がどのように受け入れられ、入力、排架され、書架で手に取れるようになるか。資料検索システムで検索でき、デジタルアーカイブで閲覧できるようになるか。資料の保存・公開にあたっての細かい気遣いとは、を体験する」です。

イントロダクションに、資料室を開架→閉架と巡りつつ当資料室の図書・雑誌・地図・絵葉書・写真・チラシがどのような経緯で収集されてきたか、多摩中央信用金庫 40 周年記念事業に端を発する多摩文化資料室の発足、『多摩のあゆみ』の創刊、これまで続く刊行によってできあがってきたご縁をベースに、各資料が集まってきたことを解説します。生徒さんの住まいのある国立市や国分寺市、稲城市の開架書架の前では、実際に図書資料を手にとってもらいます。

閉架の別置資料は中性紙封筒に入れられています。マップロッカーでは、地図やポスターをできるだけ折らないよう、保存しています。フィルム資料は湿度管理が出来るドライキャビネットに保存しています。それらには各資料を末永く朽ちさせずに大切に保存し、公開に供しつづける工夫があることを感じてもらいます。

次に、当財団ホームページ「資料検索システム」「たましん地域文化財団/デジタルアーカイブ」に触れてもらい、生徒さんの住まいのある市の絵葉書などを閲覧してもらいます。古い絵葉書に興味を持ってもらうだけでなく、その後に行うスキャン作業の「完成形」を見てもらう意味があります。

ここから実際の収集・整理作業の体験に入ります。

当資料室では内部資料ではありますが、1990 年から多摩地域の歴史・文化に関する新聞記事を収集し、pdf でスクラップしています。新聞記事スクラップ pdf を概観しどのような記事がス



クラブされているかを感じてもらいます。その後、職場体験に向けて 10 日ほど貯めておいた各紙多摩版から必要な記事を、生徒さん自身に選定してもらいます。そして複合

コピー機による pdf スキャン、Acrobat による pdf 編集を体験します。また生徒さん自身の誕生日の記事を探して、おみやげに持ち帰ってもらっています。

次は絵葉書のスキャンと画像編集の作業です。実際に古い絵葉書に触れ、傾くことのないようスキャンし保存、Photoshop を使ったトリミングや画像調整などの体験をします。生徒さんたちは、生まれたときにはパソコンやタブレットなどが暮らしの中にあつた世代です。スキャン作業やアプリケーション、デジタルアーカイブの操作の飲み込みがとても早いことには、職員一同、毎回の職場体験でとても驚いています。

また令和 6 年度の職場体験では、厚手の雑誌資料を入れる中性紙封筒にマチを作る作業を体験してもらいました。手先の器用な生徒さん、あまり得意でない生徒さんいろいろですが、丁寧に作業をする大切さを感じてもらえたようです。

終わってのち少々手直しが必要な場合もありますが、生徒さんたちの手で行われた作業は、当資料室の資料保存に生きていきます。体験前のイントロダクションでもそれを説明し、生徒さんたちが「仕事の意味」を感じてくれることを願っています。

おわりに

3 日間の緊張の職場体験を終え、生徒さんたちは学校へ帰っていきます。その後、各学校からの御礼状が事務局に届きます。そこには「普段では学べない昔の書物の整理など貴重な体験をたくさんでき、とても勉強になった」「貴重な古い資料を保存する作業を初めてした。自分に向いているかもしれない」「古い歴史資料の整理という貴重な経験ができ、とても嬉しい。閲覧者側の使用の便利さと作成側の大変さの差に大変驚いた。」「資料ひとつひとつの管理にとっても時間をかけていて、手間をかけて丁寧に物事を進める大事さを学んだ」「実際に歴史資料にふれたり見たりする体験を通して、資料を傷つけないように丁寧に作業を続けるなど、仕事の難しさや大変さを感じました」とありました。

以前、ある方とこんな話をしました。「俺たちは小学生の頃から土器拾いをしたり、遺跡の発掘の手伝いなどから考古学の魅力を学んできた。そうした経験の中から、この世界に入ってきたけど、これからの中学・高校生はどうなんだろう」と。「本物に触れる」ほどその魅力を学べる機会はありません。職場体験がそのきっかけのひとつになっていくことを祈ってやみません。

コロナ禍での Web 広報とその後のあり方

東京都立埋蔵文化財調査センター 舟木 太郎

はじめに

5 類感染症に指定され世間的にはほぼ収束したとみなされるようになった現在においても、新型コロナウイルス感染症によって引き起こされた変化は、不可逆的なものとして尾をひいているように思われます。社会の一部である博物館業界、さらにその中のほんの小さな一部に過ぎない当館においても事情は同じです。今回課されたお題はコロナによって変化した普及活動についてということで、スペースの関係もありとても全てについて言い尽くすことはできませんが、私が個人的に深く関わった事項を中心に記してみたいと思います。

コロナ禍での Web 広報施策

新型コロナウイルス感染症の蔓延と緊急事態宣言によって当館が受けた影響は多岐にわたりますが、ここで細かく説明する必要もないのではないかと思います。臨時休館とイベント等の中止、入館人数制限等の対応は、細かな違いはあれ、日本中のどの博物館や美術館でも同じだったに違いありません。

入館自体ができなかったり、イベントが開催できなかったりするということは、つまるところ普及啓発のチャンネル自体が失われていることになるわけで、博物館のミッションの大きな部分が機能不全に陥っていることを意味します。避けられない外部環境によるものとはいえ、なにもしないまま手をこまねいているわけにもいきませんが、人との直接の接触が制限されるなかでとれる選択肢がそれほどあるわけではありません。当館でも通常の普及啓発活動の代替手段として、多くの博物館と同じく Web の活用という方法を選ぶことになりました。

もともと当館では公式のウェブサイトと X (当時は Twitter) アカウントを広報手段として利用していましたが、コロナ禍で求められた Web 発信とは、展示鑑賞や体験教室の代替体験の提供という、それまでとは全く違う役割です。これに対して当館が行ったのは YouTube 動画の作成と、企画展示の特設 Web サイトの作成です。

YouTube については、体験教室が開けなくなったかわりに、教室で行っている内容を紹介しようということで動画を作成しました。素人ながら、個人的に簡単な動画製作の経験があったので、ある程度「これならできそうだ」という見込みもありました。題材としては当館の催し物として人気があるもの、あるいは自宅で比較的簡単に自分で試してみることができるもの、という観点で、これまでに「火起こし」「勾玉作り」「縄文原体*つくり」という 3 つの動画を作成・公開しています。機材としては既存の写真撮影用のものや私物のカメラ等を主に流用しました。組織として Adobe のアカウントを持っているため、動画編集用のソフトである adobe premiere を追加の費用負担なしで使うことができたのは恵まれていた点でした。問題は、後にも触れますが、かなりの時間と手間がかかることで、どの程度の品質を目指すかにもよるものの、特に編集は時間をかけようと思えばいくらでもかけられてしまいます。

Google サイトのサービスを利用することで企画展示の内容を

紹介する特設ウェブサイトの作成も行いました。これまでに 2021~2023 年度の 3 年度分を作成しています。Google サイトのサービスの利用は無料で、Google のアカウントさえあれば追加の費用は必要ありません。作業自体も展示パンフレット用に撮影した画像を配置し、テキストを入力するだけです。慣れてしまえば難易度も高くありません。問題としてはどうしても展示パンフレットと内容がかぶってしまうことですが、展示風景等を掲載することで臨場感を加えることができることと、PC・スマホで見やすいことが利点でしょうか。当館では 360 度撮影が可能なカメラも所有していましたので、サイトのトップページには展示会全体の様子がわかるように 360 度画像を掲載しています。

※縄文原体は縄文土器の表面の模様をつけるための道具。縄を撚って作る。

コロナ後の課題(と宣伝)

Covid-19 の 5 類指定等に伴って、当館の活動もほぼコロナ前と同様の水準に戻りました。行事の回数も以前と変わりなく、学校見学等についてもかなり人数・回数は戻ってきています。喜ばしいことではありますが、こうなってくると問題になるのがコロナ禍に対応して始めた新業務をどうするか、という問題です。動画作成を例にとると、先にも述べたとおり動画の編集等についてはかなり時間を要し、またある程度まとまった時間をかけて行いたいものでもあるので、通常業務が増えてくると、両立はそれなりに難しくなります。実際のところ動画作成についても先の 3 本を製作してから、2 年程度間が空いてしまっています。一度始めたものであるから、と惰性で続けてしまう必要もないですが、「勾玉作り」動画に関しては視聴回数も 1 万回を超えている等、それなりに需要があると(手前味噌ながら)思う部分もあります。本来であれば当館が社会に対して提供すべき価値と、それを最大化するための人的・金銭的リソースの配分がどうあるべきかを考えて、新事業の継続可否・投入労力についてもそれに基づいた判断がされるべきなのでしょうが、言うは易しで、現実にはなかなか、ということなのです。実際にはこれから微妙なやりくりを続けるしかないのでしょうか。とは言うものの実は次の動画を準備中で今年中(いや、今年「度」中かも…)のアップロードを目指しています。先の 3 本の動画も含めて、QR コードからぜひご覧ください、と最後は宣伝で締めさせていただきます。



企画展示特設ウェブサイト
(当館ウェブサイト。各年度企画
展示紹介ページよりリンクあり)



当館 YouTube チャンネル

「戻る」ではなく、新たな段階に「進む」意識を

多摩六都科学館 原 朋子

はじめに

令和5年5月、新型コロナウイルスが5類感染症になったことを受け、多摩六都科学館でも感染症対策のため制限をかけていた体験型展示物の利用再開や、体験プログラムの定員・実施内容などを見直して、活動はほぼコロナ禍前の状態に戻りました。しかし定員数の制限がきっかけで利用者にとこった変化は、いわゆる「コロナ明け」をした後も続いています。

感染症対策で大きく変化した「応募者数」

ソーシャルディスタンスという言葉が既に懐かしくなりつつありますが、感染症対策で一番影響が大きかったのは、人と人の距離をとるためにプラネタリウムドームや体験プログラムの会場に入れる人数を大きく減らしたことでした。当館はドーム席数が多いこと、体験プログラムで参加者以外の付き添い人数に制限がないことなどから、参加・体験のハードルが低いことが特徴でもありました。それが感染症対策により、ドーム定員は一番減らしたときで従来のほぼ1/3に、プログラム定員も約半分に減らして付き添いも1人まで、と絞ったことで、一気に間口が狭くなってしまいました。従来の利用者数で少ない席を取り合う状況になったのです。



令和3年2月の工作教室。1テーブルあたりの参加者を3〜4人から1人に減らした

プラネタリウムでは、週末の混雑を避けて大人の層が平日に来館する流れができ、それに応えた「大人向けプラネタリウム」が人気を博すという、不幸中の幸いとも言える流れができました。一方、体験プログラムでは今までになく、応募倍率が高くなる現象が起きました。これは、当館以外の施設も同様の対策を行っていたことに加え、特に令和2〜3年度あたりは学校や地域で行われていた様々な行事の開催が縮小・廃止されたことにより、社会的に（特に子どもの周辺で）「何か体験性のあることをしたい・させたい」という飢餓感が高まったからと考えられます。多摩六都科学館は令和3年5月末に緊急事態宣言が解除されて以降は感染症対策をとりながら様々な体験プログラムを行っていたため、何か体験ができる場所を多くの人たちが探した結果、口コミや各種媒体で当館の存在が伝わり、新規層からの応

募増に繋がったようです。この頃から、子ども対象の事前申込型教室で定員割れを起こすことはほとんどなくなり、元々人気の高かった工作教室や野外観察会は当選倍率が4、5倍から10倍以上にまで跳ね上がりました。

コロナ明け後も続いた変化

ありがたいことにこの傾向は現在でも続いています。応募倍率の高さをただ喜んではいられません。利用者からは当然、「何度申し込んでも全然当選しない」という声が多く寄せられ、それが長く続くと「どうせ当たらないだろう」と今までの利用者だけでなくこれから来る可能性のあった人たちが足を運ぶ動機自体も逃してしまう可能性もあるからです。運営的にはニーズに応じて定員枠の拡大や実施機会の増加が望まれますが、実施者側ではマンパワー不足等で対応が難しく、応募倍率の高さは現在の大きな悩みの種でもあります。

ただ、これを応募者と受講可能人数だけの問題に留めず、科学館の発信のしかた等も見直す流れも生まれてきました。現在当館の定期発行物であるロクトニュースには主にこれから開催するイベントの案内を載せていますが、来館すれば誰でも体験できる展示物や申込不要の体験スペースの存在が知られていないのではないか、発信の内容や広報戦略自体を検討しなおす必要があるのではないか、といった議論が始まっています。



入場者制限をせずに開催した令和6年夏の特別企画展「ロクト昆虫図鑑」会場

おわりに

コロナ禍を経た現在は、止まった時が元に戻ったのではなく、次の段階に進んで科学館の置かれた状況やコンテンツを見直し、アップデートを図るチャンスの時期でもあると思います。目の前のことだけに囚われず、広く、長い視点を持って、科学館のこれからを考えていきたいです。

国立ハンセン病資料館 啓発活動の新たな取り組み

国立ハンセン病資料館 占部 好子

国立ハンセン病資料館は 2023 年、前身の高松宮記念ハンセン病資料館の開館から 30 周年を迎えました。当館は、国の誤ったハンセン病政策に起因する苛烈な差別の歴史を伝え、二度と過ちが繰り返されないよう、ハンセン病患者・回復者及びその家族の名誉回復をはかる目的を持つ資料館です。

【活発化する出張講座、定着したオンライン事業】

コロナ・パンデミックは、病型は異なるものの、感染症を理由とした差別、偏見という社会の現実を再度私達に突き付けました。当館ではコロナ禍、オンライン講座を急ピッチで導入し、ハンセン病回復者からのメッセージを多くの方へ届けました。ポスト・コロナの現在、オンライン講座は当館のサービスとして定着しています。遠隔地、複数の拠点を持つ企業の社員研修など、多様なニーズに応えています。

一方で、復活した対面の出張講座にも多くのご要望をいただき、2023 度には、出張講座全体で来館の団体者総数を上回る 15,574 人を記録、過去最高となりました。本格導入から 10 年、出張講座は啓発活動の柱へと成長を遂げています。



過去最高の利用となった出張講座

【来館者向けサービスの見直しと充実】

コロナ禍での入館制限は、それが解かれた時に来館者が何を求めるのかを、スタッフが問い直す機会ともなりました。

当館では現在、3つのサービスの充実を図っています。

①ニーズを捉えたイベントの充実

イベントをターゲット別に見直し、それぞれのニーズに応える体験型イベントを導入しました。

初来館者向けには休日の常設展示解説を復活、形式を見直し、予約不要の 30 分スポット解説を行っています。HP・SNS で事前告知し、気負わず参加していただける対話型イベントとして、好評を博しています。夏休み期間にはクイズチャレンジや再現展示「重監房」の中に入れるイベントを実施、お子様連れを含む幅広い年齢層の方で賑わいました。さらに夏休みイベントをきっかけに、地域コミュニティラジオ局「くるめら」(85.4MHz) が当館に関心を寄せてくださり、学芸員が番組へ出演するなど、地域連携へと活動が広がりをみせています。

他方、深い学びの場の提供として、2024 年度企画展「絵どころでつながる一多磨全生園絵画の 100 年」付帯のワークショップでは少人数予約制とし、半日以上をかけて白黒写真を水彩画で描きおこす体験を開催しました。描画を通してハンセン病問題を捉える新しい試みは、大きな反響を呼び、ワークショップの

新たな可能性を拓いています。

また当館には約 38,000 冊を所蔵する図書室があり、一部を除き一般貸出が可能です。図書室内に所蔵書籍を紹介するミニ展示コーナーを設置、これまで医師の中村哲、画家の田中一村など、ハンセン病に縁の深い人物を取り上げています。HP・SNS での発信を通じミニ展示を目的に来館される方も増え、来館者満足度の向上にも繋がっています。

②アクセシビリティの向上

2024 年度の全 5 回講話「ミュージアムトーク」は来場型に戻し、手話通訳士を導入しました。これまでもアーカイブとして、字幕付動画を当館 YouTube サイトに公開してきましたが、手話同時通訳により、当日に会場で、より多くの方にお楽しみいただけるようになりました。

③デジタルコンテンツの提供

開館以来初の試みとして、2024 年 10 月から館内撮影を可としました。一部資料を除き、私的利用において来館者によるスマートフォン等での資料撮影を可とし、事後学習やご家族内での共有に役立てていただいております。さらに注目資料には「SNS OK!」マークを付け投稿を呼びかけ、当館公式アカウントでも来館者の投稿にリアクションしています。来館者の能動的な鑑賞体験が、Web を通じて多くの方と共有されることで、新たな来館者を呼び込む好循環を生んでいます。



体験イベントや SNS 発信を活発化

【ハンセン病問題の啓発と記憶の継承～喫緊の課題】

今年度、ハンセン病回復者の家族に対し国から支払われる補償金の請求期限が、当初の 2024 年 11 月から 5 年間延長されました。国が想定した申請の 3 分の 1 に留まったことが延長の理由です。この事実は回復者のみならず、その家族をも長い間苦しめた偏見や差別が、今も厳然と残っていることの表れでもあります。それはとりもなおさず当館のミッションでもあります。一層の啓発活動、情報発信、また回復者やその家族との交流拠点としての役割が、館に求められています。

2024 年 5 月現在、全国 14 のハンセン病療養所の入所者は 720 名、平均年齢は 88 歳を超えました。当事者による語り部活動も、高齢化により継承が困難になりつつあります。“当事者ではない者”による語りの継承が、喫緊の課題として挙げられています。

引き続き、次の時代の継承と学びに向けた当館の啓発活動の取り組みに、ご注目ください。

科学に興味を持ってもらうために

コニカミノルタ サイエンスドーム（八王子市こども科学館） 飯塚 由則

○はじめに

当館は平成元年 1 月に見て、触って、遊びながら科学を体験して学べる施設として開館しました。子どもたちに科学に興味を持ってもらうこと、好きになってもらうことを目指して運営してきましたが、歴史系の博物館と違い資料の収集保管や調査研究をすることはなく、専ら展示物やプラネタリウムを活用して自然科学の知識の普及啓発に取り組んでいます。

○科学展示物、プラネタリウムの活用と科学工作教室の充実

科学展示物は、1 階は「遊びカガク」というエリアがあり、こちらは物理現象を再現する展示物です。幼児から小学校低学年向けで遊びながら科学を体験できます。2 階には宇宙関連の展示やハチオウジゾウの牙、臼歯の化石のレプリカ、約 200 年前に八王子市周辺に落下した八王子隕石などの展示があり、こちらは大人でも十分興味を持って見ていただけるものです。

プラネタリウムは通常の番組の投影だけでなく、生演奏を聴きながら星空を眺める「星空コンサート」、プラネタリウムで今夜の星空を見てから天体望遠鏡で星空を観察する「星空観望会」などプラネタリウムを活用したイベントを実施しており人気となっています。

土日祝日や夏休みなどは、ほぼ毎日科学工作教室や実験などを行っています。科学指導員という専門職が自分の専門分野を生かした様々な工作、実験を企画し実施することで、多くの子どもたちに参加していただいています。出前講座や出張工作などアウトリーチにも力を入れており、幅広く科学の普及啓発に取り組んでいます。



夢ロケット

○魅力的な様々なイベントの開催

多くの方に来ていただくには常設の展示物だけでなく、様々なイベントの開催が必要と考えています。当館はその名の通り、主に子どもを対象としていますが、子どもから大人まで興味を持ていただけるようなイベント、講座などを開催しています。大人が来て魅力を感じ自分の子どもを連れてくる、高齢者がお孫さんを連れてくるという良い循環が得られればと思っています。

イベント、講座は、他の施設、高校、大学、民間企業など様々な主体と連携し実施しています。連携することにより当館だけでは実施することのできない様々な分野のイベント、講座が開催でき、より多くの方に来ていただけることを期待しています。

また、「宇宙の学校」という JAXA と協力して行う科学工作教室を開催しており、好評を得ています。



ロボットプログラミングに挑戦しよう！

○学校教育との連携

当館では開館以来、学校教育と連携したプラネタリウム学習番組を独自に製作、投影し、また、幼児でも興味を持っていただけるような幼児番組を投影、多くの子どもたちに天文の魅力を伝えています。また、デジタル化が進み八王子市の小学生は一人 1 台タブレット端末を所有していますので、当館で作成した天文情報誌や学習番組のしおり、そして昨年度は石垣島天文台との連携事業の動画を配信するなど多くの子どもたちに天文の知識を広めています。

○OPR 活動が大切

常設の展示物やプラネタリウム、様々なイベントを開催しても、どのようなものがあるのか、どんなイベントを開催しているのか、皆さんに知ってもらわないと来ていただけません。普及啓発には広報活動が重要です。以前は紙に印刷した催し物案内、広報紙、HP が中心でしたが、今は SNS など活用し情報発信しています。また、イベントによってはタウン誌などに情報提供し掲載していただいています。

○おわりに

こども科学館の科学の普及啓発の取り組みを紹介しました。こども科学館に一度来て終わりではなくリピーターを増やすため、様々な工夫を凝らしたイベント、講座などの開催、既存展示物を活用するなど、子どもから大人まで多くの方に来館していただけるような館を目指していきます。

はちはくの機織り体験

八王子市郷土資料館 服部 真理

はじめに

令和3年(2021)6月に開館した桑都日本遺産センター 八王子博物館(はちはく)では、平成13年(2001)に八王子市郷土資料館において開始した機織り実演・体験を引き継ぎ、実施しています。織物の町として栄えた桑都八王子の歴史を伝えるための教育普及活動として、職員とガイドボランティア一同で取り組み、子どもからお年寄りまで、多くの来館者に日々親しんでいただいています。本稿では、近年の機織り体験の状況と今後の展望について報告します。

機織り体験について

館内に置かれた高機は、明治時代に八王子市域で使用されていたものです。実際に縞柄の絹の布を織ることで、八王子周辺地域で自家用に行われていた機織り作業を追体験することができます。

来館する小中学生には、学芸員が機織りの実演をしています。その際に、高機の仕組みを綜^{そうこう}、踏み木^{ひきぎ}、杼^は、箆^{おさ}を動かしながら解説し、経糸の間に緯糸を交差させて一段ずつ織り込み、平織の織物が作られることを説明します。一反の布を作るのに約3,000個の繭を使用すること、そのために約100kgの桑の葉が必要となることについても説明し、桑都とよばれた往時の八王子の風景を想像してもらいます。多くの小学校で蚕を飼う学習を実施しており、養蚕農家も支援しています。そのため小中学生は、蚕が桑の葉を食べて成長し繭を作ることや、繭から糸取りすることを体験しています。このため、養蚕や織物への関心が高く、機織りの実演により、繭から衣類になるまでの多くの工程があることを学んでもらっています。学校見学の場合、時間が限られているため実演のみにして、後日個別に来館して体験していただくようお願いしています。

一般の来館者で機織り体験を希望される方には随時、体験していただきます。このため、職員とガイドボランティアの全員が



体験用に使用している高機

基本的な手順である「右の踏み木を右足で踏んで右から杼を(経糸の開口部)に入れる、踏み木を踏み代えて箆を打ち込む」という手順と機織りの仕組みの解説を習得し、いつでも来館者に案内できるようにしています。

機織り体験のための準備作業

機織り体験のための準備作業は、『図解 手織りのすべて』の著者である村野圭市氏の指導の下、ガイドボランティア有志と担当職員で行っています。作業には日頃のメンテナンス作業と

経糸準備作業があります。メンテナンス作業は、切れた経糸の修理や、緯糸の管巻などで、これらの作業により、いつでも機織り体験ができるよう努めています。経糸準備作業は、新しい経糸の糸掛けをする作業で、半年ごとに、約10mの経糸を用意しています。作業は、糸の染色、糊付け、繰返し、整経、機巻き、綜統通し、箆通し等です。

染色について補足しますと、八王子の織物は先染めの糸を使うことに特徴があります。今までの経糸準備作業では既に染められた糸を使い、先染めの織物を再現してきました。今年、新たな試みとして、市内の100年以上の歴史のある紺屋の野口染物



ガイドボランティアによる絹糸の藍染作業

店で糸を染めました。来館者から糸の染色について聞かれたときには、自分たちで染めた体験に基づいて、説明しています。

おわりに

機織り体験は、手順通り行えば、どなたにもお楽しみいただける内容で、体験者が自分で経糸の間に一段ずつ通した緯糸が織物になっていくことを実感してもらうことができ、好評いただいています。足を踏みかえると経糸が一齐に動くことを発見し、昔の道具の工夫に感動する方もあります。また、自分で少し織ることで、1、2日で一反を織った昔の人の苦労を想像し、織物の貴重さに気付かれる方もおられます。年配の方の中には、機織り機が生活の中にあった当手を懐かしく思い出される方や、機織り機を見ながら「両親が向かい合って経糸の引き込み作業をしていた」、「生家が市内の機屋で一日中、バタンバタンと機械の動く音がしていた」などの思い出を語る方もおられ、私たちにとても学びの場となっています。織られた反物は展示し、機織り体験の成果を公開しています。

経糸の準備作業については別稿で報告しましたが、言葉だけでは伝わりにくい各作業の記録映像作成にも取り組み、幅広く機織り体験の世界をお伝えすることが今後の目標です。



機織り体験で織られた反物

参考文献 村野圭市『図解 手織りのすべて』衣生活研究会、1975年/服部真理「桑都日本遺産センター 八王子博物館の体験用高機の経糸準備作業(報告)」『八王子の歴史と文化』36、2024年

都立大学 91 年館特別ミニ展示のご紹介

東京都立大学 91 年館 堀 智博・井上 翔太

はじめに

まだまだ油断は出来ませんが、コロナ禍と呼ばれる状況がひとまずは落ち着いたと判断し、都立大学 91 年館では、大学オープンキャンパスの日程（8 月 10 日・11 日）に合わせて開館しました。実に 5 年ぶりです。

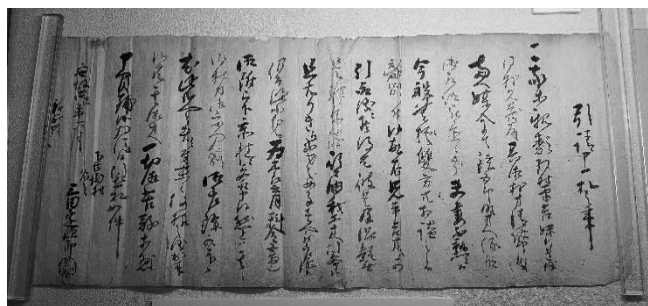
全国から集まってくるたくさんの高校生やその保護者の方に、91 年館の魅力を伝えるせっかくの機会ですので、特別ミニ展示を企画・実施しました。以下に、その内容をご紹介します。

一つめは、「愛する二人・分かれる二人—江戸時代の結婚と離婚—」です。結婚と離婚について、現代と江戸時代の作法の違いを、古文書を活用して紹介しました。現在日本史科目は高校の学習過程において必修の科目ではありません。そのため、細かすぎる内容は避けることにしました。また、保護者の方にも興味を持って貰いたいと考えて、どの世代にとっても普遍的で、かつ身近な話題である、結婚と離婚を扱うことにしました。

展示を行うにあたり課題となったのは、91 年館では、このテーマに関わる古文書を持ち合わせてはいないことです。そのため、古文書をどこか資料収蔵機関から借用するか、写真パネルを飾る案も浮かびましたが、せっかくなら本物の古文書を見て貰いたい、と考えて、ネット・オークションを利用して、古文書を購入しました。手痛い出費でしたが（笑）、レプリカではない、本物の古文書が持つ質感を、来館者に感じて貰うことが出来たと思います。

ここでは、実際に購入・展示に利用した古文書のうち、離婚に関わる古文書をご紹介します。安政 4 年（1857）6 月付の手紙で、現在の神奈川県津久井郡に住んでいた、夫鉄五郎と妻りきと言う夫婦の離婚に関わる事情が書かれています。この手紙に基づけば、夫婦には二歳になる一人娘がいて、離婚するにあたり、鉄五郎はりきが娘を養育することを承諾したこと、また、りきは離婚後、生活が困窮していたため、鉄五郎は娘の養育金として金五両（現在価格で 50 ～ 100 万円）を渡すことを約束したことが書かれています。

子供の親権や養育費など、現代の離婚でもしばしば問題になる話題が出てくることに加えて、離婚するにあたっては、これら内容を、夫婦が十分に話し合っていたことがうかがえる、大変興味深い古文書です（堀智博）。



「安政四年六月付三田定次郎書状案」（筆者所蔵文書）

知られざる多様性

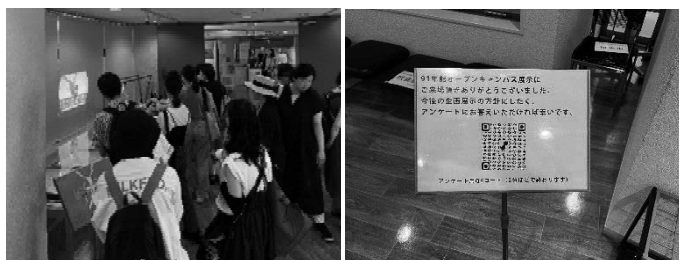
大学オープンキャンパスの一環として、実施した特別展示のもう一つが「アリヅカムシ。私の好きなムシです。」です。唐突にアリヅカムシと言われても読者諸兄の皆様には馴染みがないでしょう。アリヅカムシとはコウチュウ目ハネカクシ科に属する甲虫の一群で、体長約 0.5-2 mm ほどの非常に小さく、ささやかな生き物です。カブトムシやクワガタなどは甲虫を代表するムシとして多くの人に愛されている一方で、アリヅカムシが注目を浴びることほとんどはなく、人間の生活に一切かかわることはありません。そんなアリヅカムシですが、実は全世界で 10000 種、日本だけでも 400 種近くが知られる巨大な分類群です。あまりピンとこない数字かもしれませんが、全世界で知られるカブトムシ・クワガタムシの種数が合わせて約 4000 種と考えれば、アリヅカムシの途方もない種数の多さをイメージしやすいでしょう。そして種数もですが、アリヅカムシは変わったカタチをもつ種がとて多く、人の想像を超えるような形態を進化させている種もあります。本企画展では、アリヅカムシの標本に加え、全形写真を展示することで、実物の小ささ、拡大した時のカタチの面白さを感じてもらえるような工夫を凝らしました。また、研究者が標本を収集する理由や、どのような手法で研究を行うのかを知っていただくため、分類学で最もポピュラーで重要な、生殖器の解剖手法を動画にて紹介しました。



アリヅカムシの展示と解剖手法紹介動画

盛況だった 2 日間

会期 2 日間で計 564 人が 91 年館に来館されました。特別展が展示されている廊下は展示を見る方で溢れており、大変盛況でした。また、特別展の反応を知りたいと思い、Google フォームでアンケートを作成し、リンク付き QR コードを展示しました。スマホから読み取ることですぐにアクセスができるので手軽にアンケートに答え頂きました。9 割以上の方が満足したと答えていただき、大変好評いただいたと思っています（井上翔太）。



当日の様子とアンケートへのリンク付き QR コード

むいから民家園の近況報告

狛江市立古民家園（むいから民家園）

はじめに

当園は江戸時代に建てられた農家の長屋門と主屋の各 1 棟、平屋瓦葺の管理事務所 1 棟、果樹や池のある園庭、手作りの畑と田んぼからなる施設です。空調が効くのは管理事務所棟のみのため、活動は天候に大きく左右されます。特に近年の猛暑から、7 月中旬から 9 月中旬に予定した事業のうち、夕方以降の暑さの落ち着いた時間帯に行うものを除き、休止する、開催時期を秋以降に変更する、会場を変更するなどの対応を取りました。屋外での活動の比重が大きい当園にとって厳しい状況が続いていますが、実施した事業の参加者数は良好で、良い反応を得ています。ここでは、当園の近況として今年度 11 月上旬までに行った主な事業を報告します。

主な実施事業

●年中行事

市民からの寄贈による資料や、調査記録などをもとに展示を行っています。今年度は 11 月までに、端午の節句（4 月 27 日～5 月 5 日）、七夕（7 月 2 日～7 日）、盆棚（8 月 10 日～8 月 15 日）、十五夜（9 月 14 日～17 日）、十三夜（10 月 11 日～15 日）の展示を行いました。ススキやチガヤは多摩川に採りに行き、供え物には園庭の果樹や畑で収穫したものを用いました。十五夜と十三夜の当日は休園日でしたが、夕方から臨時開園し、園庭からの月見を楽しんでいただきました。

●イベント

5 月 5 日には「こどもの日はむいからでたのしく過ごそう！」を開催、工作や昔あそび、お菓子釣り、紙芝居や似顔絵コーナーなどを設けて賑わいました。

「みんなのむいから夏祭り」は、開園 20 周年事業を実施する際に立ち上がった「みんなのむいから民家園事業実行委員会」に委託する形で 8 月 24 日の夕方から夜にかけて開催し、およそ 450 人の来園がありました。盆踊り、風船釣りなどの夜店、和太鼓の演奏と体験会のほか、飲食物の提供などもあり、子どもも大人も楽しめました。

秋の芸術鑑賞として、9 月 22 日に都立狛江高等学校箏曲部による演奏会「秋の夕べの音楽会」、10 月 20 日に狛江能楽普及会による「むいから能楽鑑賞会」を行いました。主屋を舞台に、椅子を並べた園庭を客席にして実施したものです。能楽鑑賞会については、演目をより楽しめるよう、9 月 13 日と 10 月 17 日に初心者向けの能楽講座も実施しています。

●体験教室

これまで「むいから寺子屋」と題し夏休みに行っていた体験教室のうち、人気の高い勾玉作りは屋外で行う事業でしたので、今年度は近くの公民館の工作室に会場を移して実施しました。来園者数にはカウントできませんが、急遽追加で日程を設けるほど多くの子どもたちが参加しました。子ども生け花体験教室

は秋にずらし、11 月 2 日の開催となりました。

●職場体験

市内の中学校 2 校から職場体験を受け入れました。6 月下旬と 9 月初旬でしたので、暑い時間を避けて外に出る、休憩を多くとるなどしながら、畑の草取りや天地返し、主屋の掃除と障子の貼り替え、茅葺屋根の保守のための囲炉裏・かまど焚きといった古民家園ならではの仕事に取り組んでもらいました。

●畑作と稲作

畑では、狛江で栽培した記録があり、来園者に何らかの形でふるまえる作物を育てています。前号にて紹介した FC 東京との連携事業として行っている枝豆のほか、じゃがいも、里芋、大根、蕪などを作りました。枝豆は、事業に参加し一緒に苗を植えて収穫まで行った子どもたちだけでなく、一般の来園者にも主屋のかまどでゆでてふるまい（枝豆収穫祭／7 月 27 日開催）、大好評でした。

稲作は、狛江市の友好都市である新潟県長岡市川口地区（旧川口町）からコシヒカリの苗の提供を受けて行っています。9 月に刈り取って掛け干しをし、脱穀・脱つぶを手作業で行いました。畑で収穫した大根、蕪とともに 1 月 7 日に七草粥にしてふるまう予定です。



稲の掛け干しと職員手作りの案山子 9 月 13 日撮影

おわりに

当園では年中行事の展示、事業の講師や演者、協力者など、さまざまな場面で市内の団体や市民の協力を得ています。これからも多くの方を巻き込みながら古民家園の活用をはかるとともに、2 棟の文化財建築を守り伝えていきたいと考えています。

連携をより広く、より深く

武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館 中村 彩

ほぼ通常通りのコロナ禍の館運営

武蔵野ふるさと歴史館は、平成 26 年（2014）12 月に誕生した武蔵野市初の博物館施設です。同時に、武蔵野市歴史公文書の移管・選別等を行う公文書館機能を有するほか、指定文化財や埋蔵文化財等といった文化財の保護・普及も担っています。市民が利用できる 110 平米ほどのスペースを常時開放し、歴史資料を介した市民交流拠点としても機能してきました。

令和 2 年（2020）春、休館中の当館では全 9 名のスタッフが一日おきに半数ずつ出勤。参加者を募って実施するイベントが中止や延期となるなか、次回の企画展や特集展示の実施をめざした準備、資料の調査・記録などを粛々と進めました。また、北海道博物館が提唱した「おうちミュージアム」へも参加。当館では、広く一般向けに「おうちで歴史館」と銘打ち、学芸員や文化財指導員、公文書専門員による武蔵野市域の歴史や文化についての記事を SNS 等で発信しました。3 月 14 日からの約 3 ヶ月間にわたり掲載した全 21 件の記事の中には 5,000 を超える閲覧数を数えたものも数本ありました。当時は館内に動画作成に対応できるだけの十分な環境が整っていませんでしたが、本数は少ないものの動画コンテンツの作成にもチャレンジし、市の YouTube チャンネルに「動画で見る武蔵野ふるさと歴史館」として公開しました。それぞれ平均 300 件以上の視聴があり、微力ながら「外出自粛」を強いられた人々の興味や知的好奇心を満たす一助となれたのではないのでしょうか。

同年 6 月 1 日に再開館して以降、しばらく来館者数は半減していましたが、入館に関しては入場制限・予約制・分散制などの規制を行わなかったこともあってか、9 月以降は例年並みかそれ以上の来館者数に戻っています。5 名の担当職員全員がそろうことが難しい状況下で準備を進めた企画展「かたちの中の記憶」（同 6 月 1 日～7 月 16 日）や、文化財講座「黒曜石でナイフ形石器をつくろう」（同 8 月 22 日）、古文書解説講座（同 9 月 13 日）、「紙芝居一座がやってくる！」（同 9 月 27 日）などにも多くの方々が足を運んでくださいました。

閉鎖していた市民スペースを開放し、利用者カードの記入やアルコール消毒のお願い、マスク着用義務は時間とともに消滅し、今ではコロナ禍以前とほぼ同じような日常が戻っています。

互いに手を伸ばした連携を

さて、先般約 70 年ぶりに改正された博物館法では地域活性化のための関係機関との連携などが明記され、博物館にとって地域との連携、教育・普及が大切な役割の一つであることがあらためて確認されました。当館には平成 24 年（2012）度から運営してきた子ども向け文化財講座「むさしの発見隊」という、年に約 3 回、市域のさまざまな団体にご協力をいただきながら子どもたちと「武蔵野市らしさ」を再発見する企画があります。武蔵野市教育委員会が地域との連携強化を目的に事業化した施策であり、「武蔵野ふるさと歴史館第 3 期管理運営基本方針」（令和 5 年 4 月）でも中心に掲げられている地域連携のモデルケースで

す。今回の法改正によって、長年続けてきた地域資産の活用と協働をめざす同事業の重要性を再度認識し、引きつづき自信をもって継続していきたいと思っています。

当館には、このほかにも近隣地域との連携があります。

- ・むさしの発見隊：市域の教育機関、NPO 団体、個人で活動されている各種ジャンルの講師など
- ・井の頭自然文化園動物観察教室：井の頭自然文化園
- ・むさしのばやしチビッコ教室：むさしのばやし保存会
- ・学校教育連携事業：市内市立小学校第三学年
- ・職場体験：市内市立中学校第二学年
- ・フェローシップ（特別研修員）制度
- ・博物館実習生の受け入れ
- ・公文書館実習生の受け入れ
- ・歴史館大学における市民サポーターの育成

博物館は、文化と教育のための施設です。これからも市民や地域の人々との連携を広げ、かつ深めながら、すべての人々の大切な宝物を共に未来に伝えていきます。



令和 6 年 10 月に開催した「むさしの発見隊」の様子

10 周年リニューアルで変わること

博物館法の改正では収蔵資料のデジタルアーカイブ化とその公開も求められるようになりました。当館では以前から少しずつではありますが、所蔵資料のデジタル化・データベース化を進めてきました。今後はそのスピード感をアップしていく必要性を認識しています。それらの公開にあたっては多言語化の重要性にも着目し、国内外への武蔵野市の文化や歴史の周知をめざしたいと思っています。翻って、来館者に対しては QR コードを用いるなどして、より豊富な情報に簡便にたどり着ける仕組みづくりも喫緊の課題の一つと言えます。

武蔵野ふるさと歴史館は、令和 6 年晩秋のリニューアル休館を経て 11 年目に突入したばかりです。このたびのリニューアルでは、常設展示の充実、民俗資料のさらなる活用、中島飛行機関連情報の常設展示、公文書展示機能の強化、近現代展示エリアの拡充などに着手しました。「ふらっと寄っていつでも楽しめる」身近な博物館として、引きつづき生涯学習の推進を図り、武蔵野市の過去から未来へと思いを寄せるための活動拠点でありつづきたいと思っています。

コロナ禍前と比べ「対面」での利用者数が増加した普及活動

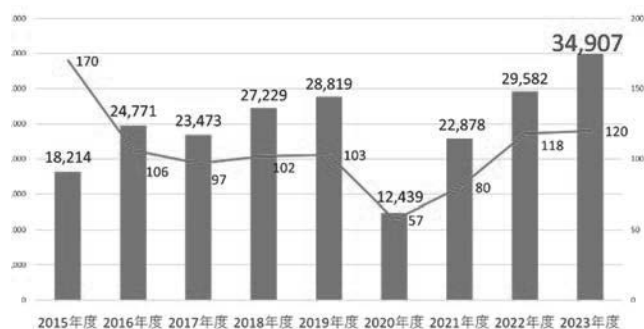
帝京大学総合博物館 甲田 篤郎

帝京大学総合博物館（以下本館）は、2015年9月14日に帝京大学八王子キャンパス内に設置された博物館です。その設置目的にある「本学の教育・研究活動と連携し、総合的・学術的な活動を行い、その向上を図るとともに、それに必要な、歴史、芸術文化、自然等の資料を収集・保管する。併せて教育・研究活動の成果の公開や、他機関との連携を通じて、大学の社会貢献を推進すること」を実現するため、博物館運営をどのような展開してきたのか、2023、24年の普及活動を中心にこれまでの取り組みと課題を振り返ります。

■コロナ禍後の対面利用増加

本館のコロナ禍における普及活動は、本誌42号「コロナ禍における人々の学習する権利を保障するための活動」や本誌43号「コロナ禍の帝京大学総合博物館—人工衛星から絵画鑑賞・学校史まで—」で2020、21年の取り組みをそれぞれ報告しています。本館利用再開時期は、2020年6月8日の大学対面授業の一部再開に合わせて学内利用を再開し、10月3日からの企画展に合わせ一般利用を再開するなど、緊急事態宣言下の東京都要請・協力依頼を受けた一般利用の休止を挟みつつ、設置主体である大学・本館ともに比較的早期に対面での授業利用・見学を再開しました。

これ以降、下図のように2021年に入館者数が増加に転じ、2022、23年にはそれぞれ過去最高を更新しています。この背景には、本館における利用者である一般利用者、帝京大学の学生、帝京大学の教職員のうち、特に学生・教職員による対面での博物館利用が活発になったことがあります。たとえば、授業利数は2019年度113件、2020年度65件、2023年度138件、連携学科・団体は2019年度18件、2020年度3件、2023年度20件、展覧会数2019年度15件、2020年度4件、2023年度21件と、概ね入館者数と同じ動きを示しています。これは初年次教育の必修科目であるライフデザイン演習において、大学史やキャンパス周辺の多摩の歴史と自然を学ぶ目的で、博物館学芸員課程や特定の学部学科に偏ることなく、多くの教職員が、授業利用で本館へ活用するようになったことや、2023年度展覧会数21件のうち16件がゼミ・授業・学生サークル等の主催の展示である



■入館者数 —一日平均入館者数

入館者数の推移

ことからわかるように、見学者としてだけでなく在学や教職員が、教育・研究成果のアウトリーチ活動の実践の場として、本館を広く学内で利用した結果です。制限されたなかで高校生活を送ってきた在学生だからこそ、現実の博物館で実物資料に触れ、展示を計画・実践することへの要望が多いと、筆者は感じています。以下に、おいてはそうした実践の一部を紹介します。

■教員が主体となり多様な主体と連携した展示



2024年1月20日～4月16日に開催された科研成果公開大学博物館連携巡回展「帝国日本と森林—近代東アジアにおける環境保護と資源開発—」は、永井リサ（経済学科講師）が参加する帝国日本と森林出版記念巡回展実行委員会主催で、旧日本帝国時代の林業を事例として、帝国主義と環境保護主義との関係や、近代日本における森林・林業をめぐる知と実践の結びつきを多角的に発信しました。



2024年5月18日～8月16日に開催された「南の楽園マリアナ諸島の物語—あなたはグアム・サイパン・ロタ・ティニアン島を知っていますか？—」は、中山京子（初等教育学科教授）主催でマリアナ政府観光局の協力のもと、一般的に「南の楽園」というイメージが強いグアムや北マリアナ諸島について、グローバル化の波に翻弄され、スペイン、ドイツ、日本、アメリカの統治を経験する中で、力強くアイデンティティや文化を継承してきた島の人々の営みや、ユニークな魅力を紹介しました。

模型を活用した文化財の公開/教育/研究/記録

国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館 具嶋 恵

大学所有の文化財「泰山荘」

国際基督教大学構内に現存する「泰山荘」は、複数の由緒ある茶室を備えた日本の近代近郊型別荘で、1939（昭和14）年に落成したものです。戦災を免れ当地に奇跡的に残された庭園を含む建造物群を、本学は1953年の開学以来、土地とともに引継ぎ、おおそそのままの形で維持・管理してきました。その歴史的文化的価値が認められ、1999年に国の登録有形文化財となつて以降は、大学博物館である当館が中心となり、より積極的に保存と活用に取り組んでいます。

文化財となつた6つの建物のうち、特に紀州徳川家15代当主の徳川頼倫が造った茶室「高風居」と、そこに差掛けとして備え付けられた松浦武四郎ゆかりの「一畳敷」は、泰山荘の敷地内では国分寺崖線の「はけ」の中腹に置かれ、小高い樹々の生い茂る、学内でも立入が禁止されているエリアにあるため、大学が年に一度設けている一般公開日以外はアクセスが制限されています。そこで、この建物の見学・体験の機会を補完すべく博物館が提案したのが、一畳敷の精巧な原寸模型の製作でした。



一畳敷の原寸模型

アクセシビリティを補完する原寸模型

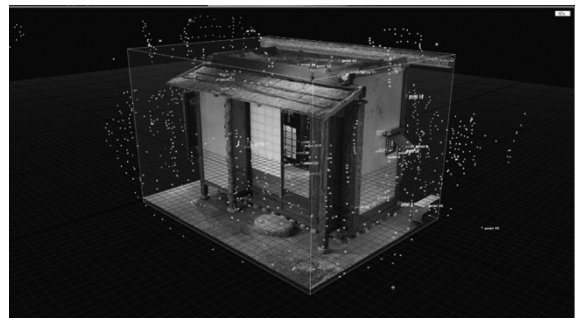
完成から130年以上経つ建築であることに加え、日本各地の古社名刹や歴史的建造物の古材を集めて作った狭小な一畳間という特異な構造であるため、伝統的な日本家屋の知識を十分に持つ大工や内装工の職人チームに作業を依頼、建物のすみずみを正確に測量した上で、実物に即した建材を用い、同等の工法で組み上げています。また随時、実物と照らしながら個々の古材の質感、細かな室内の意匠から経年の傷にいたるまで手作業で再現を図りました。製作の過程で、技法や素材など改めて確認できたことも多く、構造面での新たな知見を得たことは、完成した模型の中に入りその特異な空間をリアルに体験するというレプリカ製作の第一の目的とは別の、博物館にとってのもうひとつの大きな収穫であると言えます。

模型は解体・移動が可能な構造で、2018年の特別展で披露した後、現在は館内で常設展示しており、時に他館からの貸し出しの要請にも応じています。模型（複製）の製作は、公開が限定されている資料へのアクセシビリティの問題を解消する上で十分有効であり、また公開ができるとしても建築物など簡単には動

かせない文化財を、広範囲で共有することができるという意味でも、文化財の保存と活用を両立させうる現実的な手段であると実感するところです。加えて、万一オリジナルが消滅する事態となった際には、調査データを反映する複製が、本物の代替の役割を果たすのみならず、かつて在ったものを記録する一種のアーカイブズとしての機能も期待できると考えています。

デジタルモデルによる学習機会の開拓

この「複製」の成果を踏まえた新しい取り組みとして、2021年からは本学の情報科学の教員と共同で、3DデータやVRの技術を用いた泰山荘のデジタルモデルの制作を行なっています。当該教員が指導する学生の卒業研究では、茶道の要素を組み入れた泰山荘の3Dデジタルアーカイブの作成に続き、一畳敷原寸模型をベースにしたMR（Mixed Reality）アプリケーションの開発、さらには高風居全体を多角面から撮影して3DCGを制作、オンラインゲームのプラットフォームに設置して文化財を体験・学習するコンテンツを構築するなど、さまざまな試みが展開しています。特に今年度は、教員自ら高風居の3Dレプリカを制作、一畳敷のVR体験プログラムを開発し、パイロット版による学内ワークショップを皮切りに、9月には当館学芸員とともにドイツ・ドレスデンで開催されたICOM-UMACの年次大会の場で、博物館におけるデジタル技術の活用事例としてこれらを発表、体験会を行ないました。



3Dデータから一畳敷のCGを作成

複製がもたらす可能性を考える

好古コレクターとして名を馳せた松浦武四郎と、日本の近代化の中で文化財保護を推進しようとした徳川頼倫の遺した建築が、ミュージアムにおける保存と活用の機会を広げるアイデアの源となっているのは感慨深いことです。さらに言えば、模型の制作は、美術や工芸、建築における表現として重要な意義を持つ「写し」の系譜にもつながりうるかもしれません。その写す（移す）という行為が単なるコピーに留まらず、様々な由緒の集積であり、時代の中で移築を重ねて生き延びた一畳敷の本質を引き継いでいるのも、大いに興味の惹かれるところです。

様々な専門知の集まる大学という強みを活かし、今後も博物館資料による教育普及の新たな可能性を模索していきたいと考えています。

日獣大付属博物館における普及活動

日本獣医生命科学大学付属博物館 石井 奈穂美

■ 当館における普及活動

日本獣医生命科学大学付属博物館は、本学で学芸員課程を履修する学生の実習の場として 2015 年に開館した。開館当初は原則として大学で行われるイベント（オープンキャンパス・大学祭等）にあわせた特別開館時のみ学外からの見学を受け入れていたが、当館が使用している校舎の耐震工事や COVID-19 の感染拡大に伴う長期休館を経て、現在では事前予約制ではあるものの見学を随時受け入れている。

普及活動についても、学芸員課程履修生のみを対象としていた開館当初に比べ、活動の幅が広がりつつある。本稿では、これまでの当館の活動や、今年度新たに実施した取り組みを紹介したい。

■ 普及活動の例①：学芸員課程履修生への教育

開館以降、本学の学芸員課程履修生を対象とした教育活動を継続している。開館当初は履修者数が年間 20 名程度と少数であったため、5 人程度の班に分け、班ごとにガラスケース 1 台を用いた展示の立案から陳列まで一通りこなすことを実務実習としていた。2023 年度からは履修者数の増加により同様の内容の実習が困難となったため、現在は主に見学実習の場として当館が活用されている。

これまで当館では館園実習を受け入れて来なかったが、本学の卒業後に通信教育により学芸員資格の取得を目指す社会人から実習の受け入れについての相談を受け、今年度は特例的に館園実習を受け入れた。今後の館園実習の受け入れについては当館の課題の一つとなっている。



学生による骨格標本の展示(2021 年度)

■ 普及活動の例②：地域の子どもたちを対象にした活動 ～地域の博物館との連携～

2018 年から本学の所在地である武蔵野市の博物館（武蔵野ふるさと歴史館、以下 歴史館）との連携が続いており、地域の子どもたちを対象とした歴史館の教育普及活動に、当館スタッフが講師として参加している。

当館は博物館での勤務経験を持つスタッフがいない状態で 2015 年に開館した。開館当初



ワークショップの様子(2022 年度)

は、子どもたちを対象とした教育普及活動のノウハウを持ち合わせていなかったが、歴史館の皆様のご助言もあり、講師として 4 回のワークショップを実施する中で、今後も当館で活用することが可能な学習プログラムを開発することが出来た。講師として呼ばれた立場ではあるが、当館に比べ歴史が長く、普及活動のノウハウを持つ歴史館との活動は、当館にとって学ぶことが多かった。

■ 普及活動の例③：地域の子どもたちを対象にした活動 ～地域の小学校に通う児童の受け入れ～

耐震工事による休館やコロナ禍を経て、2024 年 2 月から団体見学の受け入れを再開した。当館では 10 名以上での見学を希望する場合は団体として扱っているが、スタッフによる解説が可能な人数は 15 人までとしている。これは、古い木造校舎の教室を活用した当館の展示室は決して広いとは言えず、解説の実施に十分なスペースを確保することが難しいことが理由の一つである。

一方で、地域の小学校からの要望を受け、特例的に 1 クラス全員（30 名程度）の見学を受け入れる機会が増えている。この場合、主な見学場所を最も広い自然系展示室のみとし、担任の先生や保護者の方に館内の誘導をして頂く形で対応をしている。



剥製を観察する児童(2024 年度)

■ 普及活動の例

④：障害児童の受け入れ

2024 年 8 月から 9 月にかけて障害児童が所属する放課後デイサービスによる団体見学を 4 回受け入れた。障害児童が所属する団体による見学の申込みは前例がなく、当館としては初の試みであった。

申し込みの際に、スタッフによる解説は不要との連絡を受けていたため、積極的な解説は行わず、自然系展示室内にて展示している剥製をモチーフにした塗り絵を教材として配布し、自由に活用してもらった。なお、当館は通常は車での来館を禁止しているが、団体担当者から電車移動が困難な児童がいるとの相談を受け、特例的に車での来館を受け入れ、博物館に最も近い学内の駐車場に駐車できるよう手配した。

今回の対応では問題にはならなかったが、2 階建ての館内にはエレベーターや車椅子昇降機は無く、また三つある入口のすべてに階段があるため、足が不自由な方や車椅子の方は当館を見学することが困難である。博物館として多様な利用者に対する配慮が求められる中で、館内のバリアフリー化が大きな課題である。

鈴木遺跡資料館と普及活動

小平市鈴木遺跡資料館 中野 純

はじめに

鈴木遺跡資料館は鈴木遺跡の発掘品、特に後期旧石器時代の出土品を公開している資料館です。昭和 56 年（1981）に開館し、平成 10 年（1998）に現在地に移転しました。

新型コロナウイルス感染症の蔓延が発生する前年度である平成 30 年度の一年間の開館日数は 166 日、1467 人の来館者がありました。その後コロナ禍を経て令和 5 年度の開館日数は 173 日、来館者数は 1912 人となっております。この来館者数のみではコロナ禍の前後で来館者数に大きな変動がなく、博物館活動には影響が無かったというようにも見えますが、大きな変化はこの間にありました。



新型コロナウイルス感染症対策中の鈴木遺跡資料館の窓口

鈴木遺跡の国史跡化

鈴木遺跡資料館の展示のメインテーマである鈴木遺跡は、令和 3 年（2021）3 月 21 日に国の史跡に指定されました。しかしこの頃は、国の史跡になるという、遺跡にとっても資料館にとっても重要なタイミングでありながら、人を集めるイベントを実施することが出来ない社会情勢でもありました。これは鈴木遺跡資料館と、鈴木遺跡の両方を多くの方に知っていただく大きな機会を失ったともいえます。

緊急事態宣言などによる臨時休館があったため、令和元年度から令和 3 年度にかけての開館日数は 155、140、154 日と推移し例年より少なくなりましたが、1290 人、1597 人、2705 人と増加し、令和 4 年度には 173 日の開館で、3002 人の来館者に来ていただきました。

令和 4 年からの来館者数の増加

令和 4 年には、3 月に鈴木遺跡の立地する地形を見て歩く遺跡ウォークや、同年 8 月には石器づくり体験といった、コロナ禍以前に行っていた活動を復活しています。特に遺跡ウォークについては、大変多くの申し込みがあり、初めて 1 日に 2 回の実施をして対応することになりました。

令和 4 年の夏には西武鉄道による西武新宿線沿線での遺跡巡りイベントが行われ、この間に入館者数がかなり増加しました。ただし令和 4 年度は全体的に来館者数が多くなっており、まだ遠くに出かけるには躊躇する社会情勢から、近場の出かけ先に選ばれていたのではないかと考えております。

翌令和 5 年度は、来館者数がほぼ 3 分の 2 になっています。前年比という観点に立つと、コロナ禍以上の減少が発生しているということは、資料館の普及活動の見直しを迫られているともいえるかもしれません。



令和 6 年度遺跡ウォークの様子

おわりに

鈴木遺跡資料館は小平市の施設のため、自治体の判断による休館期間がかなり発生していました。またイベントについても同じように比較的慎重な判断をしていたと言えます。

今後、鈴木遺跡の整備予定地を整備していくにあたり、鈴木遺跡資料館の普及活動はますます重要となります。

現在はコロナ禍以前に行われていた事業を復活させ、学校の校外学習やその他の教育活動や、市内の公民館での講座などへの協力といった他主体による活動への協力を行っているという段階に入っています。

また史跡の整備が進むことで、ボランティアの募集を行うなど新しい活動も考えて行くことになるものと考えています。

東京都公文書館の普及活動

東京都公文書館 瀧澤 明日香

はじめに

当館は、国分寺市泉町の新館に移転し、令和2年4月に開館、開館記念展示やセレモニーを予定していましたが、新型コロナウイルス感染症対策により休館となりました。1年後、ようやく展示を開催することは可能となりましたが、大幅な予定変更をせざるをえませんでした。そのような中、知名度がほぼない当館を少しでも知っていただけるよう、展示に関連したクイズなど非接触のイベントを行いました。

博物館等とは違い、一般的に“公文書館”は敷居が高いと思われるがちです。行政資料や古文書といった文字情報は難しく、資料にビジュアル性もないことから、興味や具体的な目的がなければご来館いただけません。

この印象をいかに払拭し、実は面白い、興味深い、また来たいと思ってもらえるか、コロナ後、新しい地で模索しながら普及活動をしている一端をご紹介します。

展示

当館では、年に2回（夏・秋）に企画展示を開催しています。展示では、文書の内容を図表やグラフにする、絵図や地図を増やす、数は少ないですがいわゆる“モノ資料”を展示する、動画を上映する、“展示の道先案内役（ねこ・うさぎ・たぬき）”に展示を語らせる等のように工夫し、わかりやすく親しみやすい効果を創出しています。

イベント

今年度の夏展示では、伊豆諸島をテーマとしていたので、展示している資料の「伊豆海島風土記 六」に描かれた魚類を使った魚釣りゲームを企画し、現代語に翻訳した釣魚図鑑を作成しました。このような所蔵資料を使ったイベント等も、展示にあわせて開催しています。



魚釣りゲーム（釣竿も魚籠も手作り）

また、他の部署から依頼を受けてイベントに参加することがあります。昨年度は、東京都総務局行政部からの依頼を受け、多摩東京移管 130 周年記念イベント「超たまらん博」に参加しました。このイベントでは、明治26年と昭和18年の多摩地域を

パズルにして、多摩地域が神奈川県から東京府に移管されて130年の節目であることを紹介しました。



多摩東京移管 130 周年記念イベント「超たまらん博」参加風景

地域との連携

当館は、東京市史の編纂（東京市史稿）を中心とした事業の性格からこれまで多摩地域との連携が手薄でしたが、国分寺市へ移転するにあたり、多摩地域との連携を深めたいと考えていました。新型コロナウイルス感染症拡大が緩和された令和4年度、国分寺市と共催展示が実現し、国分寺市民を中心に多くの方が来館していただきました。以後、企画展示に足しげく通ってくださる方もいます。

当館が所蔵する資料は“東京都域”全般なので、他の施設とも連携できるよう検討しています。



共催展示「史料に見る国分寺のあゆみ～江戸時代の村々」

おわりに

そのほかにもSNSや公文書館だより等で当館の魅力を情報発信しています。しかし、資料を実際に見たり体験する普及活動も大切ではないかと考えています。

今年度、東京都公文書館が移転して5年の節目となりました。この節目の年に三多摩公共博物館協議会の準会員となり、多くの施設と接点を持ったことは普及活動を進めていく上で貴重な機会になると感じています。

中央大学大学史資料館における普及活動

中央大学大学史資料館 北村 厚介

はじめに

中央大学大学史資料館（以下、当館）は 2024 年 4 月に中央大学多摩キャンパス（八王子市東中野）に開館した新設の資料館です。

中央大学では、新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）の対策として、2020 年に中央大学感染症特別対策本部（以下、対策本部）を設置し、キャンパスへの入構制限など、必要な対策を実施してきました。新型コロナが、2023 年に感染症法上の分類を変更されたことにより、キャンパスへの入構制限は解除され、2024 年 6 月には対策本部も解散いたしました。

そのため、当館では、新型コロナ以前と以後との普及活動の変化について言及することはできませんが、現在取り組んでいる普及活動について紹介していきます。

Web サイト・SNS の活用

新設の資料館として力を入れているのは、開設されたことを周知するためのメディアを媒介とした広報活動です。

大学史資料館公式サイトを中央大学公式サイト内に開設して、資料館の概要、展示内容、利用案内などを紹介し、折々のニュースを取り上げています。

SNS では、公式 YouTube と公式 X を開設しました。公式 YouTube では、制作した資料館 PR 動画を紹介しており、資料館の開設を学内外に広く周知しています。公式 X では、毎日の出来事や昔の出来事を紹介し、当館の認知度の向上を図っています。

授業利用・団体見学の誘致

自校史教育のため、多摩キャンパス内の授業利用を積極的に誘致しています。初年次教育での利用を中心として、様々な学部で授業で利用していただき、職員による解説を含め、本学約 140 年の歴史を伝えています。

学員（OG・OB）の団体見学も積極的に受け入れています。本学で初めて開設された資料館ということもあり、多くの学員の方からの申し込みをいただいています。



大学史資料館を訪れる中央大学マスコットキャラクター「チューー王子」

シンポジウムの開催

今年度における当館の特徴的な普及活動として、中央大学大学史資料館開設記念シンポジウム「多摩地域と私立大学」があげられます。シンポジウムは、2024 年 10 月 5 日（土）、立川市女性総合センター（アイムホール）にて開催されました。

このシンポジウムは、日本の社会変容が進み、地域社会と大学とが画期を迎えている現在、地域社会と大学との関係がいかにあるべきか、多摩地域に拠点を置く中央大学・明星大学・帝京大学の事例から検討しました。

本学文学部教授・宮間純一による趣旨説明の後、帝京大学総合博物館館長・帝京大学経済学部教授 高橋裕史氏「多摩地域と私立大学：『多摩地域の中の』大学と『大学の中の』多摩地域」、明星大学教育学部准教授 高橋珠州彦氏「『多摩科目』群の取り組みと明星大学」、当館・資料館事務室 北村「多摩地域と中央大学」の 3 報告が行われ、たましん地域文化財団歴史資料室 保坂一房氏にコメントをいただいた後、ファシリテーターを務めていただいた明星大学教育学部教授 小林一岳氏を中心に討論が行われました。

討論では、フロアからの活発な質問もあり、多摩地域と大学（特に私立大学）との関係について、多くの論点が整理され、今後の展望を得ることもできました。



中央大学大学史資料館開設記念シンポジウム「多摩地域と私立大学」討論の様子

おわりに

2024 年に開設された当館では、積極的な普及活動を行い、多くの方に来館していただくための周知を行っています。

また、シンポジウムを通じて、周知を図ると同時に大学間の連携、大学と地域との連携を深めることも行っています。

今後は、高大連携を含めて、地域との関係をより深める普及活動を行っていく予定になっています。

東京都三多摩公立博物館協議会 会員名簿

館名	住所	電話	交通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町 1-6-3	042-396-3800	西武新宿・国分寺・西武園線「東村山駅」西口下車徒歩 8 分
府中市郷土の森博物館	府中市南町 6-32	042-368-7921	京王線・JR 南武線「分倍河原駅」から京王バス「郷土の森総合体育館」行き、「郷土の森正門前」下車すぐ
町田市民文学館ことばらんど	町田市原町田 4-16-17	042-739-3420	小田急線「町田駅」東口から徒歩 12 分／JR 横浜線「町田駅」ターミナル口から徒歩 8 分
町田市立自由民権資料館	町田市野津田町 897	042-734-4508	小田急「鶴川駅」6 番バス乗り場から「野津田車庫」行きまたは本町田經由「町田駅」行きで「綾部入口」下車／小田急線・J R 横浜線「町田駅」21 番乗り場から本町田經由「野津田車庫」行きまたは「鶴川駅」行きで「袋橋」下車
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町 1-684	0428-23-6859	JR 青梅線「青梅駅」下車徒歩 15 分
調布市郷土博物館	調布市小島町 3-26-2	042-481-7656	京王相模原線「京王多摩川駅」下車徒歩 4 分
瑞穂町郷土資料館 けやき館	瑞穂町大字駒形富士山 316-5	042-568-0634	JR 八高線「箱根ヶ崎駅」下車徒歩 20 分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原 5	0428-86-2731	JR 青梅線「奥多摩駅」から小河内方面行きバス「奥多摩湖」下車
福生市郷土資料室	福生市大字熊川 850-1	042-530-1120	JR 青梅線「牛浜駅」東口から徒歩 7 分
武蔵村山市立歴史民俗資料館 武蔵村山市立歴史民俗資料館分館	武蔵村山市本町 5-21-1 武蔵村山市大南 3-5-7	042-560-6620 042-566-3977	多摩モノレール「上北台駅」から武蔵村山市内循環バス「かたくりの湯」下車徒歩 1 分 分館：西武拝島線・多摩モノレール「玉川上水駅」から武蔵村山市内循環バス「大南三丁目」下車徒歩 3 分
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市 920-1	042-596-4069	JR 五日市線「武蔵五日市駅」下車徒歩 17 分
羽村市郷土博物館	羽村市羽 741	042-558-2561	JR 青梅線「羽村駅」西口から徒歩 20 分／JR 青梅線「羽村駅」東口からコミュニティバスはむらん羽村西コース「郷土博物館」下車
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸 2-6-41	042-493-8585	西武池袋線「清瀬駅」北口から徒歩 10 分／西武池袋線「清瀬駅」北口バス乗り場 1 番から西武バス「郷土博物館入口」下車徒歩 1 分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町 3-12-34	042-525-0860	JR 中央線「立川駅」南口から「新道福島」行き・「富士見町操車場」行きバス「団地西」下車徒歩 5 分／JR 中央線「立川駅」南口から「立川駅北口」行きバス「農業試験場前」下車徒歩 5 分／JR 青梅線「西立川駅」下車徒歩 20 分
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村 3221	042-598-0880	JR 五日市線「武蔵五日市駅」から「藤倉」行きバス「郷土資料館」下車
日野市郷土資料館	日野市程久保 550	042-592-0981	多摩モノレール・京王線「高幡不動駅」から「百草団地」方面バス「高幡台団地」下車徒歩 5 分／多摩モノレール「程久保駅」下車徒歩 7 分
日野市立新選組のふるさと歴史館	日野市神明 4-16-1	042-583-5100	JR 中央線「日野駅」から京王バス「高幡不動駅」行き「日野七小入口」下車徒歩 5 分／京王線・多摩モノレール「高幡不動駅」から京王バス日野駅行き「日野七小入口」下車徒歩 5 分
小金井市文化財センター	小金井市緑町 3-2-37	042-383-1198	JR 中央線「武蔵小金井駅」北口もしくは「東小金井駅」からココバス北東部循環⑩「小金井公園入口」下車徒歩 5 分
くにたち郷土文化館	国立市谷保 6231	042-576-0211	JR 南武線「矢川駅」下車徒歩 10 分
東大和市立郷土博物館	東大和市奈良橋 1-260-2	042-567-4800	西武拝島線「東大和市駅」から西武バス「イオンモール」行きで「八幡神社」または都営バス「青梅車庫」行きで「八幡神社前」下車徒歩 2 分
バルテノン多摩ミュージアム	多摩市落合 2-35	042-375-1414	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩 5 分
東京農工大学科学博物館	小金井市中町 2-24-16	042-388-7163	JR 中央線「東小金井駅」南口から徒歩 9 分
江戸東京たてもの園	小金井市桜町 3-7-1	042-388-3300	JR 中央線「武蔵小金井駅」北口 2 番 3 番停留所からバス「小金井公園西口」下車徒歩 5 分／西武新宿線「花小金井駅」南口より徒歩 5 分「南花小金井」(小金井街道沿い) 停留所から「武蔵小金井駅」行きバス「小金井公園西口」下車徒歩 5 分
たましん歴史・美術館	国立市中 1-9-52	042-574-1360	たましん歴史・美術館(休館中)：JR 中央線「国立駅」南口前／たましん美術館：JR 中央線「立川駅」北口より徒歩約 6 分
東京都立埋蔵文化財調査センター	多摩市落合 1-14-2	042-373-5296	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩 5 ～ 7 分
多摩六都科学館	西東京市芝久保町 5-10-64	042-469-6100	西武新宿線「花小金井駅」北口から徒歩 18 分／西武新宿線「花小金井駅」、「田無駅」からはなバス第 4 北ルート「多摩六都科学館」下車すぐ
国立ハンセン病資料館	東村山市青葉町 4-1-13	042-396-2909	西武池袋線「清瀬駅」南口から西武バス「久米川駅北口行」で約 10 分／西武新宿線「久米川駅」北口から西武バス「清瀬駅南口行」で約 20 分(いずれも「ハンセン病資料館」で下車)
コニカミノルタサイエンスドーム (八王子市こども科学館)	八王子市大横町 9-13	042-624-3311	JR 中央線「八王子駅」北口・京王線「京王八王子駅」から西東京バス「みつい台」行き等「サイエンスドーム」下車徒歩 2 分
桑都日本遺産センター 八王子博物館	八王子市子安町 4-7-1 (サザンスカイトワー八王子 3F)	042-622-8939	JR 中央線「八王子駅」南口から駅直結／京王線「京王八王子駅」から徒歩 8 分
東京都立大学 91 年館	八王子市南大沢 1-1	042-677-1111	京王相模原線「南大沢駅」下車徒歩約 5 分
狛江市立古民家園 (むいから民家園)	狛江市元和泉 2-15-5	03-3489-8981	小田急線「狛江駅」または「和泉多摩川駅」から徒歩 10 分／小田急線「狛江駅」北口から「多摩川住宅」行きバスまたは「こまバス」(北回り)で「児童公園」バス停前
武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館	武蔵野市境 5-15-5	0422-53-1811	JR 中央線・西武多摩川線「武蔵境駅」から徒歩 12 分／JR 中央線「武蔵境駅」北口からムーバス境西循環に乗りし、4 番「武蔵野ふるさと歴史館」下車すぐ
帝京大学総合博物館	八王子市大塚 359	042-678-3675	多摩モノレール「大塚・帝京大学駅」下車徒歩 15 分／京王線「聖蹟桜ヶ丘駅」「高幡不動駅」「多摩センター駅」から京王バス「帝京大学構内」行きに乗りし終点にて下車
国際基督教大学博物館 湯浅八郎記念館	三鷹市大沢 3-10-2	0422-33-3340	JR 中央線「三鷹駅」南口または「武蔵境駅」南口から小田急バス「国際基督教大学」行きにて終点下車／武蔵境駅からタクシーで 10 分
日本獣医生命科学大学付属博物館	武蔵野市境南町 1-7-1	0422-31-4151	JR 中央線・西武多摩川線「武蔵境駅」南口から徒歩 2 分
小平市鈴木遺跡資料館	小平市鈴木町 1-487-1	042-323-2233	西武新宿線「小平駅」南口から西武バス「武蔵小金井駅」行きもしくは JR 中央線「武蔵小金井駅」から西武バス「小平駅南口」行き「回田本通り」下車徒歩 5 分／西武新宿線「花小金井駅」から立川バス「国分寺駅北口」行き「共済住宅」下車徒歩 10 分
東京都公文書館	国分寺市泉町 2-2-21	042-313-8450	JR 中央線・武蔵野線「西国分寺駅」から徒歩 8 分／京王バス・寺 85 系統「いずみプラザ前」から徒歩 4 分／ぶんバス・万葉けやきルート、北町ルート、日吉町ルート「西国分寺駅東」から徒歩 5 分
中央大学大学史資料館	八王子市東中野 742-1	042-674-2132	多摩モノレール「中央大学・明星大学駅」から徒歩約 10 分



東京都三多摩公立博物館協議会公式サイト

東京都三多摩公立博物館協議会会報
ミュージアム多摩 No. 46

発行日 2025年2月28日

発行 東京都三多摩公立博物館協議会

2024年度会長 くにとち郷土文化館

東京都国立市谷保 6231

042-576-0211

編集委員 日本獣医生命科学大学附属博物館 石井 奈穂美

小平市鈴木遺跡資料館 中野 純

東京都公文書館 高木 謙一・瀧澤 明日香

中央大学大学史資料館 北村 厚介